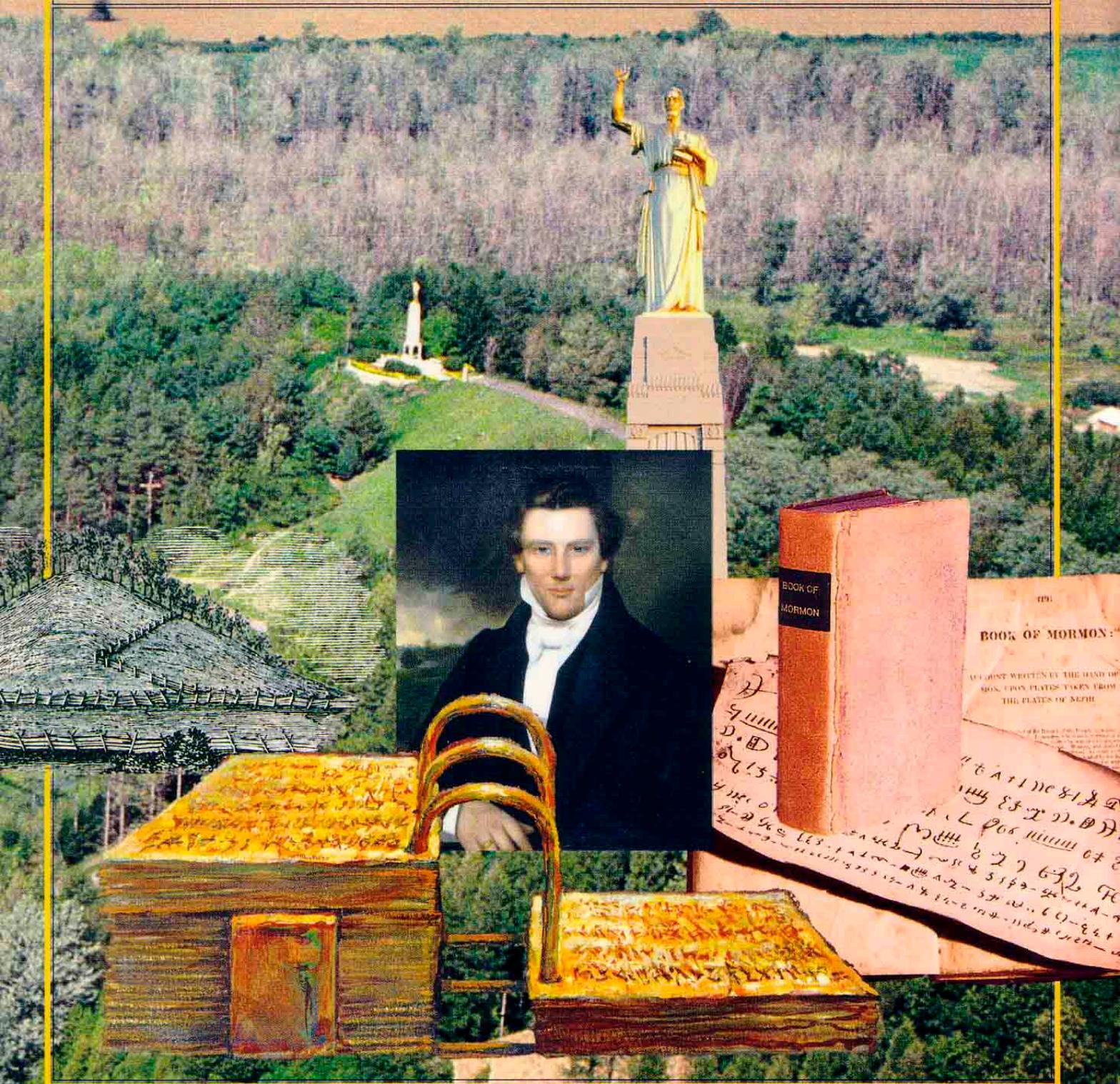


1988
7

聖徒の道

末日聖徒イエス・キリスト教会



聖徒の道

1988年7月号

本書は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本書は以下の言語で出版されています。月刊—イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊—インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊—アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン
 十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オーグス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン
 顧問：ヒュー・W・ピノック、ジーン・R・クック、ウィリアム・R・ブラッドフォード、キース・W・ウィルコックス
 編集長：ヒュー・W・ピノック
 教会機関誌ディレクター：ロナルド・L・ナイトン
 編集主幹：ラリー・A・ヒラー
 編集副主幹：デビッド・ミッチェル、アン・レムリン
 制作：レジナルド・J・クリステンセン
 マーケティング・マネージャー：トーマス・L・ピーターソン

聖徒の道 1988年7月号第32巻第7号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
 〒106東京都港区南麻布5-10-30
 電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 精興社
 定 価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)
 半年予約1,100円(送料共)
 普通号150円, 大会号 350円

International Magazines PBMA 8807JA

Printed in Tokyo, Japan.

Copyright © 1988 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

●定期購読は、「聖徒の道」申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課☎03-440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒194東京都町田市小川1704-1/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター☎0427-96-2820

Published monthly by the Corporation of the President of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. Application to mail at second class postage rates is pending at Salt Lake City, Utah. Subscription price \$14.00 a year. \$1.75 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, United States of America. Subscription information telephone number 801-531-2947.

POSTMASTER: Send form 3579 to "Seito no Michi" a. 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, United States of America.

●—も く じ

なすべき業あり	ゴードン・B・ヒンクレー	2
小さなことが大切	ジョセフ・B・ワースリン	9
改宗しそもなかつた改宗者		
ダニエル・ウェブスター・ジョーンズ	ジャック・マカリスト	11
「私にはその本を焼くことはできません」	ドン・ピンチェンツォ・デ・フランチェスカ	14
完全な真理	スペンサー・W・キンボール	19
会員伝道	キャロル・ワグナー・タトル	20
質疑応答	ベス・T・スパックマン	23
蔓	ラリー・ヒラー	24
なぜすべての人にモルモン経を		
伝えなければならないのか	ジョイ・E・ジェンセン	25
信仰がなければならない	アーサー・R・バセット	29
家庭訪問メッセージ		
「愛は……自分の利益を求めない」		36
モルモン経と今日の家族	ダーウィン・L・トーマス	37
—若人のために—		
「もしモルモンでなかったら」	リアン・アスキュー	41
「成長させて下さるのは、神である」	マイケル・コール	43
遠まわり—弟への手紙	ビビアン・ハーマー	47

チャーチニュース

各地のたより

子供のページ(別冊付録)

たなばた	2
ヒラマンと2,000人のわかものたち	6
おもちゃばこ	8



神叫他成長

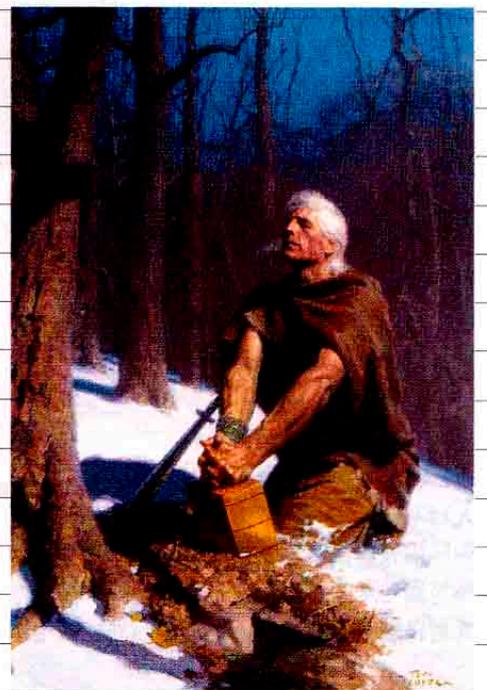
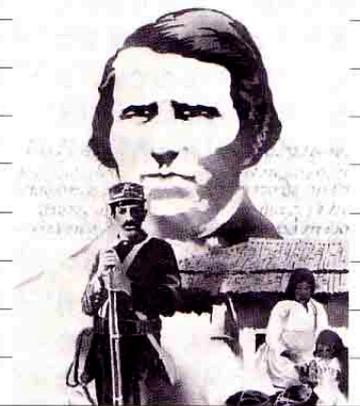


表紙：モルモン経は天使がひとりの少年に現われたことによって再び世に出された。「イエス・キリストについてのもうひとつの証」が刻まれた金版は、クモラの丘から掘り出され、その翻訳、印刷はすべて神の導きによって行なわれた。モルモン経には世の人々への神のみ言葉が書かれている。

絵(裏)：「モルモン経初版の印刷」グレイ・E・スミス画

ジョセフ・スミスの肖像画：復元イエス・キリスト教会の許可を得て掲載

Daniel Webster Jones



なすべき業あり

第一副管長

ゴードン・B・ヒンクレー

教会員の皆さんに、主から与えられた偉大な戒めについてもう一度考えるよう勧告したいと思います。その戒めは、主の弟子になりたいと望むすべての人々に与えられたものであり、ないがしろにすることのできないものです。またこの戒めを前にして引き下がることも許されません。それは、地のすべての人に福音を教えるという責任です。

これは復活された主が昇天を前にして与えられた最後の教えであり、この神権時代が始まったときにも繰り返された戒めです。1835年に最初の十二使徒定員会が組織された後に、副管長のオリヴァ・カウドリが使徒たちにひとつの責任を与えました。以来それは十二使徒定員会会員にとって、ひとつの憲章のようなものとなってきました。その中には次のような勧告が含まれていました。

「人々の救いのために熱心に務めていただきたい。人は皆貴い存在である。

……福音を出で行かせなければならない。やがて福音は全地を満たすようになるであろう。……あなたがたには他の人では肩代わりできない務めが託されている。福音を簡潔



人々の救いのために熱心に務めて
いただきたい。人は皆貴い存在で
ある。……福音を出で行かせな
なければならない。やがて福音は全地
を満たすようになるであろう。

で純粋なままに宣言しなければならない。私たちはあなたがたを神と、その恵みの言葉にゆだねたい。」(「教会歴史」2：196-98)

オリヴァ・カウドリのこの勧告に続いて、主から啓示が与えられました。それは十二使徒たちに与えられたものであり、教義と聖約112章の啓示として知られています。この啓示の中には次のように書かれています。

「されば汝は朝な朝なに論じ、日々汝が警めの声を出すべし。而して夜ともならば、世の人々をして汝の演ぶる言葉によりて眠らしむることなかれ。

……然らばわれ汝と共に在らん。されば、如何なる所にも汝わが名を宣ぶる所には、人々のわが言を受け入れんため汝に有効なる門戸開かるべし。」(教義と聖約 112：5，19)

言葉の選き者

教会初期の時代にも、宣教師がカナダなどアメリカ以外の国々へ派遣されまし

た。1837年には海を越えて英国にも宣教師が派遣されました。予言者ジョセフ・スミスはカートランド神殿でヒーバー・C・キンボール長老にこう言いました。「ヒーバー兄弟、主

のみたまが『わが僕ヒーバーを英国に遣わし、わが福音を宣言し、かの国に救いへの門戸を開かしめよ』と私にささやきました。』

ヒーバー・C・キンボールは堅固な信仰の持ち主でしたが、人前で話をする能力がないことを心配して、謙遜に次のように言いました。

「主よ、私は言葉の遅き者であり、かくのごとき務めには向いておりません。学問、知識、信心、宗教の国として全世界のキリスト教国に確たるかの国で、またその聡明さをもって知られる人々を前にして、私にどのような伝道ができるというのでしょうか。」(オルソン・F・ホイットニーによる引用「ヒーバー・C・キンボールの生涯」p.104)

しかし結局彼は同僚と共に英国へ渡ったのです。言葉は大体アメリカと同じでしたが、習慣的には数多くの違いがありました。しかし、彼らはそのようなことに気をとられることはありませんでした。彼らは救いの福音を伝え、ほかの事柄についてはほとんど話しませんでした。歴史は彼らの働きのすばらしい成果を証しています。それからほどなくして、回復された福音のメッセージは、海の島々にも伝えられました。宣教師たちはそれらの地で、まったく見聞きしたことのない生活習慣を体験しました。それはヨーロッパの国でも繰り返され、宣教師たちは新しい言葉を覚え、行く先々の地で未経験の風習になじんでいきました。

聖徒たちは西部に移住した後も、荒地の開拓、共同体の確立などの大事業を抱えていましたが、全世界の人々に福音を伝えるという責任を後回しにすることはありませんでした。1852年の大会で会衆の中から幾人かが選ばれ、宣教師として召されました。彼らはヨーロッパだけでなく、中国やシャム(現在のタイ)にも送られました。この開拓期に宣教師が派遣されたインドに、長い歳月を経て、今再び福音の種がまかれていることを思うと、感無量のものがあります。

開拓者たちの大胆さ

教会の開拓期における指導者と会員の大胆さにはただ驚

くばかりです。大胆というよりは、強い信仰という表現が適切かもしれません。彼らは教会員の頭数においても力においてもそれほど恵まれていない時代に、遠い異国へ福音を宣べ伝えるために、最大の努力を払ったのです。どのような教会員でも、パーレー・P・ブラット長老が残したチリへの旅の記録を読めば、初期の宣教師たちの勇気と信仰に感謝の気持ちを覚えずにはいられないはずです。彼らは全世界の人々に福音を伝えるという主から託された責任を、全身全霊を尽くして果たしたのです。

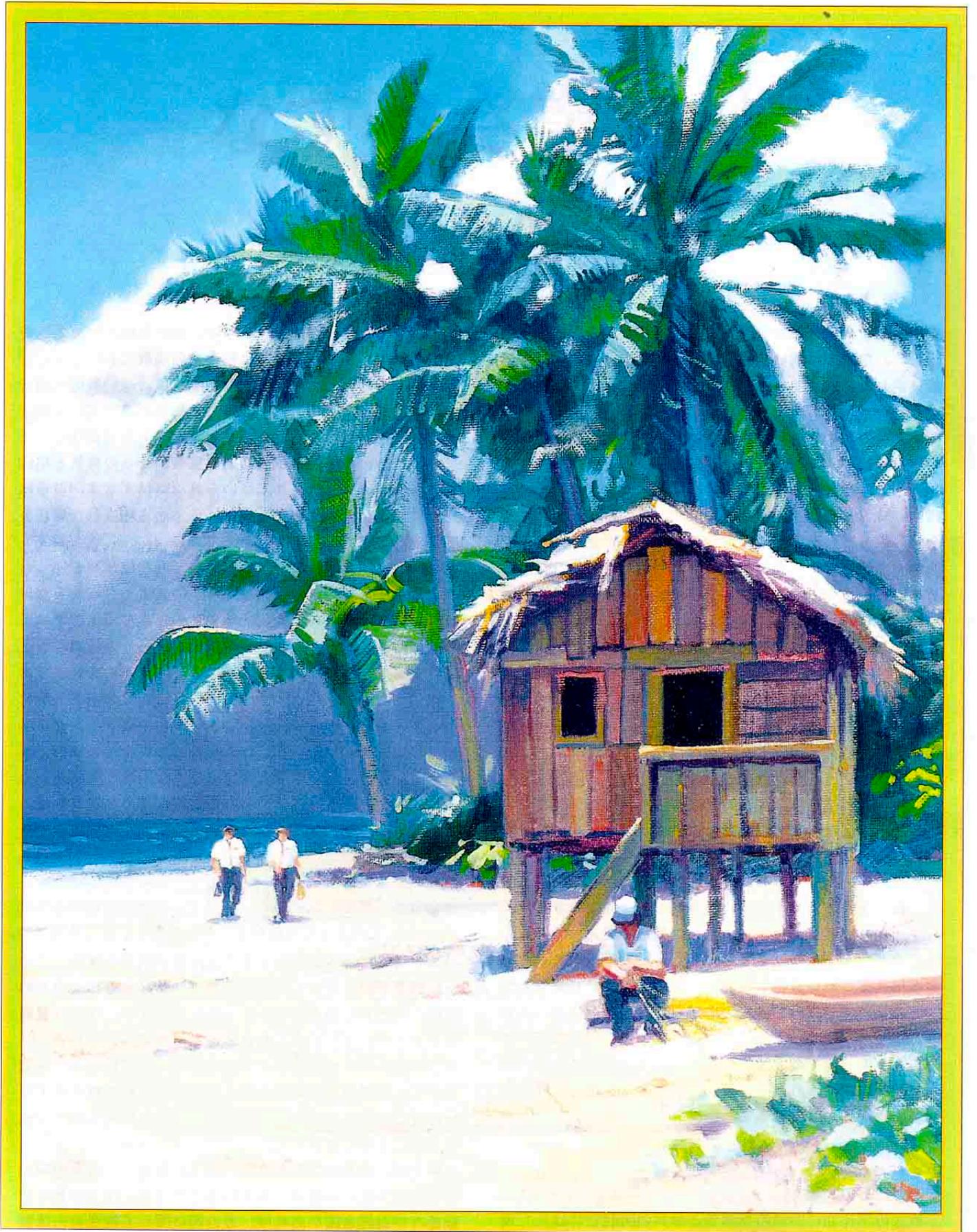
大海原を越えて進んだ彼らの旅は、非常に困難を伴うものでした。目指す国へ到着しても、迎えてくれる友もなければ仲間もないのです。任地でどのような環境の中に置かれるのかについて、前もって訓練があったわけではなく、これから福音を宣べ伝える人々の言葉さえ知らないような状況でした。食べ物や生活環境の変化に苦しむ中で、病に倒れる人も数多くいました。しかし救いの福音を人々に伝えよという戒めを受けていた彼らの心は使命感で満たされていたのです。生活環境の変化は様々な困難な問題をもたらしましたが、彼らに与えられた重要な務めと比べれば、何ほどのものでもありませんでした。

狭くなった世界

全世界に福音を広めるという点で、19世紀半ばから現代にかけて、どのような変化があったかを考えてみてください。

まず第1にはっきり言えるのは、近代的な交通手段によって世界が狭くなっていることです。昔は太平洋横断といえば、何週間も何カ月もかかったものですが、今では豪華なジャンボジェット機でおいしい食事を楽しみながら、サンフランシスコから東京までわずか10時間で行くことができます。世界の通商路線を絶えず行き交う航空機の膨大な輸送量と、それがもたらす異文化の交流の効果も決して軽視することはできません。

第2は、世界的な教育水準の向上とともに、国々の間の相互理解が著しく深められていることです。今では自分が行きたいと思う国があれば、その国に関して数多くの情報



近代的な交通手段によって私たちの住んでいる世界は狭くなりつつあります。そしてそのもたらす各国間の交流も無視することはできません。

を得ることができ、まったく右も左もわからない状態で行くというようなことはしないで済みます。また自分の国にいながらにして、訪問する国について、かなり多くの事柄を知ることができます。今はどこに住もうと、国際的な放送網、通信網を通して、パリ、ワシントン、南アフリカのプレトリアの様子などを茶の間で見ることができる時代です。ニューデリー、ブエノスアイレスなど世界中至る所の出来事をほとんど同時に知ることができるのです。

3番目は、全世界の言語の壁が次第に取り払われつつあ

ることです。英語が世界の主要都市で通用するだけではありません。宣教師たちは任地の国々の言語で福音を伝えることができるよう、かなりの語学力を身につけたうえで派遣されています。教会の言語訓練センターは、全世界への伝道を進めるうえで、非常に大きな役割を果たしています。言語訓練センターとそこで行なわれる実際の訓練は、世界的に見ても非常に優れたものです。

もうひとつ、宣教師が神聖な務めを効果的に進めるうえで、非常に大きな祝福となっているのが、伝道部を管理す



世界中の宣教師が、教会での豊富な指導経験を持つ伝道部長夫妻から、その召しに関して導きを受けるという祝福に恵まれています。

る役員の高さです。経験のない未熟な人がその任に召されることはありません。彼らは夫婦で働きますが、共に豊富な経験を持つ、成熟した人々です。彼らは指導者、また助言者として、若い宣教師を教え、夫婦で宣教師となった老夫婦をカウンセリングし、ひとりもわなに落ちてつまずいたりしないように見守っています。

高まる相互理解

最後にあげておきたいことがあります。すべての人を神の子としてひとつに結び合わせてくれる原則への理解が驚くほどに深まっています。それは世界各地で見られる現象です。私の目には、地球の反対側に住んでいる人同士でも、ほとんど違いがないように見えますし、していることもさほど変わりがないように思えます。結局、文化的な違いこそあれ、人間は皆基本的には同じなのです。たとえば夫婦愛、親子愛、美しいものを賞賛する気持ち、悲しむ人への思いやり、指導者への敬意などは、すべての人に共通したものです。またいざというときに人間以上の存在者に助けを求めたり、すべての人を裁く絶対者を信じているという点も、洋の東西を問わず共通しています。否定しようのない良心のささやき、善悪の感覚などもそうです。

私は何年も前に、いわゆる非キリスト教国で働く宣教師とキリスト教国で働く宣教師とでは、人々に教える事柄に何か違いがあるのですかと聞かれたことがあります。私はそれに対して、教える相手は皆同じ人間であり、皆永遠の真理への感受性を持つ人々ですから、基本的に同じレスプランを使っていますと答えました。世界のどこの国の人でも、何かひとつの刺激を与えると、本質的に同じ反応を示します。寒いときには暖を求め、皆同じ喜怒哀楽の情を持っているのです。また人々はそれぞれの場所で、絶対的な存在者を心の支えにしています。所によってその絶対者に対する呼び名や表現は様々ですが、皆その存在を信じ、人間を超越した力を求めているのです。

「共に徳に導かれて共に悦ぶ」

隣人との関係、あるいは異なる文化との関係の中で、自分と相手の違いが福音を宣べ伝えるうえで障害になっているように思える場合があります。普通そのようなときには、穏やかに、また丁寧な態度で対処すれば、問題を解決することができます。主の戒めに従って福音を伝える人々には、相手との相違点を克服できるよう、主のみたまの助けが与えられるということを証します。次の主のみ言葉の中には、その過程がはっきりと説明されています。「この故に、教ゆる者も受くる者も互いに相悟り、両者共に徳に導かれて共に悦ぶなり。」(教義と聖約50:22)

私は、福音を分かち合う務めを最も効果的に果たす助けとして、主のみたまが約束されていることに感謝しています。主のみたまはほかの人々の中にも見ることができますが、主のみ業を行なう人は、自分自身の中にもそれを感じることができます。主のみたまの助けがあると、目からうろこが落ちるように、相手との表面的な相違点を克服できるのです。温かな触れ合いとお互いの理解を通して、それまでは見えなかったすばらしいものが見えてくるようになります。まさしく、「互いに相悟り、両者共に徳に導かれて共に悦ぶ」ことができるのです。

私たちが携わっているこの業は、確かに驚嘆すべき業です。現在教会の伝道部は優に221を数え、35,000人以上の宣教師を擁しています。教会は北米、中米、南米、また鉄のカーテンの外側のあらゆる国々、アジアの多くの国々や太平洋諸国に広がっています。そして、回復された福音はさらに多くの国々へ広められつつあります。その成果は、目をみはるべきものがあります。どの国の末日聖徒も、同じメッセージを語り、同じ熱心さをもって、唯一の永遠の真理について証を述べています。皆さんの犠牲、献身、働きには非常に大きなものがあります。しかし、その結果にも驚嘆すべきすばらしいものがあります。

主が道を開かれる

私たちの行く手にはさらに大きな試練が待っています。

このみ業について知らない人々が無数にいることを考えれば、全人類に福音を伝えるという責任を果たすには一体どうしたらよいのだろうかと疑問に思うはずです。今の段階では、法律的に伝道が許されていない国もあります。私たちはそのような国々の法律を尊び、従わなければなりません。しかし、怠りなく備えをし、忍耐するなら、主がふさわしい時に門戸を開いてくださることでしょう。その時を決めるのは主ご自身です。ただし、私たちには今すぐになすべきことがたくさんあります。みずから努力し、へりくだって靈感を祈り求めるなら、家族、友人、隣人、知り合いの人々に福音を分かち合いたいという気持ちがさらに強められることでしょう。

現在の教会の成長ぶりは、実にめざましいものです。天の神が末の日にこの奇跡を起こしておられるのです。しかし、私たちがこれまで目にしてきたことは、これから後に起こるもっと偉大な事柄の予兆にすぎません。このみ業を果たしていくのは、次の主のみ言葉を信じているがゆえに働き努める謙遜な人々です。

「およそ、出で行きてこの王国の福音を宣べてすべての事に終始忠実なる者は、何人も心に衰えを感じることなく、また心暗くなることもなし。体も手足も関節も衰えず、神知りたまわずにはその頭髮一筋も地に落つることなく、また飢ゆることも渴くこともなかるべし。」(教義と聖約84:80)

このみ業は必ず成功を取めます。主がこう約束しておられるからです。

「誰にても汝らを受け入るる者には、われもまたそこにあらん。そは、われ汝らの前に先立ちて行くべければなり。われは汝らの右に在り、また左に在らん。わが『みたま』は汝らの心の中に在り、またわが天使らは汝らを囲みて懐き支えん。」(教義と聖約84:88)

神から託された使命を携え、約束された祝福を信じ、信仰をもって前進しようではありませんか。そうすれば、主は私たちの働きを祝福してくださるはずです。まず模範によって、次に靈感を通して与えられた教えによって、私た

ちの周囲にいる人々に福音を伝えようではありませんか。人手によらず山から切り出された石は、やがて全地を満たすようになります。(ダニエル2章参照)私はこれが真理であること、また、天父に導きと靈感を求めるなら自分に合った方法でみ業に貢献できることを証します。私たちが押し進めているのは神のみ業です。神の恵みがあれば、決して失敗することはありません。□

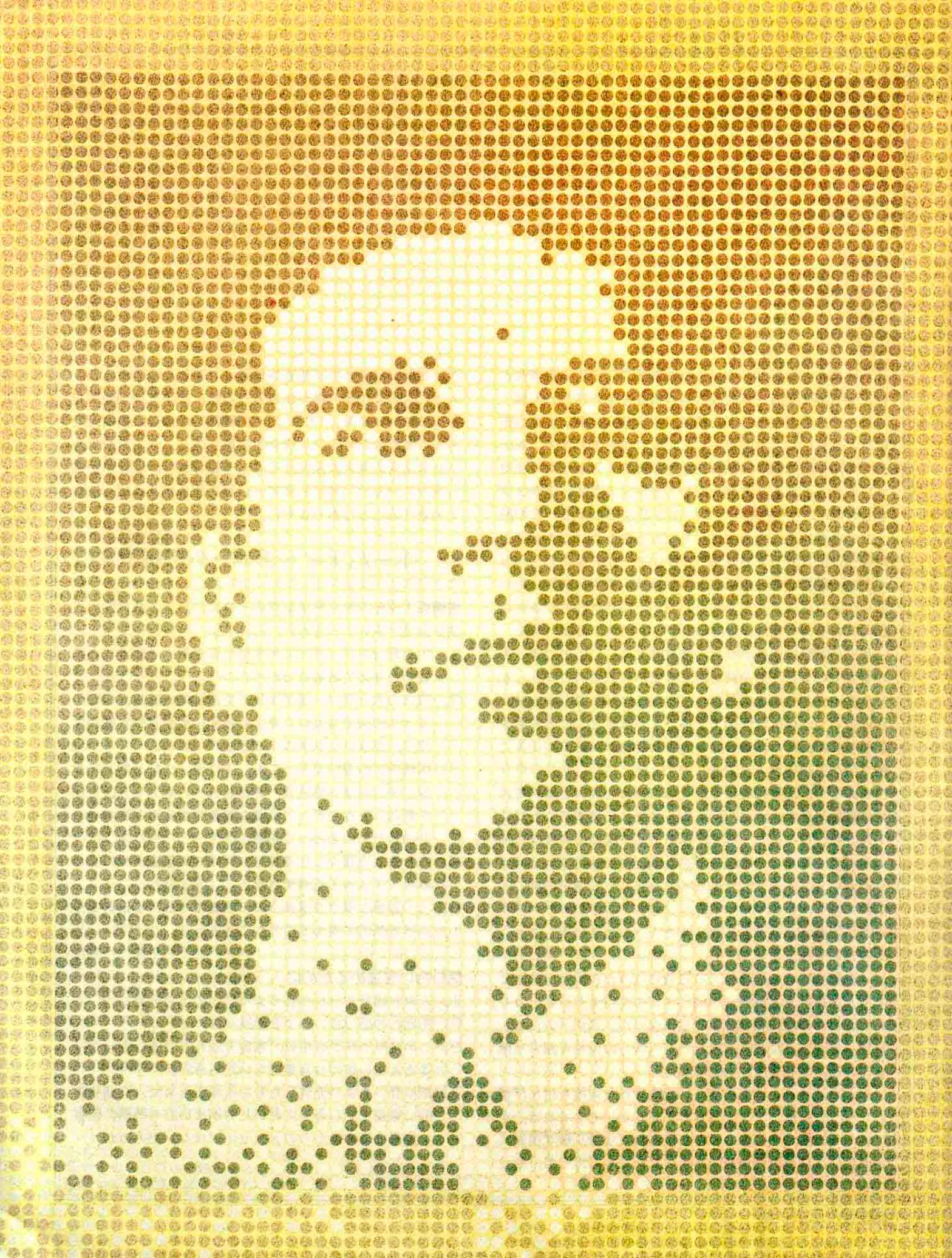
ホームティーチャーへの提案

強調点：ホームティーチングのときに、以下の点について話し合うとよいでしょう。

1. 主は私たちに、すべての人に福音を教えるようにとの戒めを与えておられる。
2. 現在の教会員は、通信手段や交通機関の発達、教育システムの向上などにより、前世紀の教会員や宣教師と比べ、恵まれた状況の中で伝道ができる。
3. 国籍などの違いはあっても、人は皆、夫婦や親子の愛情、美に対する感受性、苦しむ人への思いやり、人間を超越した存在者への認識、善悪の感覚などにおいて共通したものを持っている。
4. 人と人との様々な相違点は、相手への敬意、愛、主のみたまによって克服できる。
5. 主の靈感と導きを求めながら行なうなら、伝道の業をより効果的に進めることができる。

話し合いを進めるために

1. 人々と福音を分かち合うようにとの主の戒めについてあなたの感じていることを述べる。
2. このメッセージの中に、家族で読んだり話し合ったりするとよい聖句や言葉はないだろうか。
3. 話し合いをより充実したものとするために、訪問する前に家長と話し合っておいた方がよいだろうか。監督や定員会指導者からのメッセージはないだろうか。



小さなことが大切

十二使徒評議員会会員
ジョセフ・B・ワースリン

問題は、時間の管理の仕方ではなく、そのような時間が与えられている自分自身をどう管理していくかということです。私たちが永遠の生命を願うならば、これらの小さなことを決しておろそかにすべきではありません。

最近私は、この世はごく小さな事柄から成り立っているということを強く感じています。しかしその小さな事柄が実はとても大切なものなのです。私は、そうした小さなことが自分自身や他の人々との関係の中で、また神との関係の中で、きわめて大切な位置を占めていると確信しています。

主はこう言われました。「この故に善を為すにうむことなかれ。これ汝ら今偉大なる一事業の基礎を置きつつあればなり。それ、小なる事より偉大なる事起る。」(教義と聖約 64:33)

私たちの生活の中で一般に見られる小さなものとして、私は日々の時間を刻む「分」という単位をあげたいと思います。人間一人一人にとって、時間は欠かすことのできない大切な財産です。それは、無視することも変えることもできません。私たちは1時間は60分という決まった枠の中で生活していかなければなりません。一日の決まった時間を私たちは勝手に増やしたり減らしたりすることはできないのです。

問題は、その時間の管理の仕方ではなく、そのような時間が与えられている自分自身をどう管理していくかということです。1分という時間は微々たるものかもしれませんが、個人の能力に関して言えば、その1分をどう管理するかによって成功するか否かが決まってくるのです。

自分自身との関係

ではまず、自分自身との関係について考えてみましょう。自分の生活の中の小さな事柄が秩序正しくあるためには、それなりの努力が必要です。健康への配慮や精神面の安定を図ることもそのひとつです。皆さんは、日々の仕事に必

要なエネルギーや力を蓄えられる適度な運動をしているでしょうか。食物の摂取はバランスのとれたものでしょうか。体に良い食物を食べているでしょうか。また精神を鍛え、積極的になれる方法を何か考えているでしょうか。

私たちの体は、私たちが何を食べ、何を考え、どんな運動をするかによって変わってきます。私たちが賢明さに欠けると、これらの小さな事柄はたちまち健康上の問題を引き起こし、私たちの成功を妨げ、奉仕する能力を低下させてしまうのです。

他の人々との関係

他の人々との関係について考えるときに、私は主なるイエス・キリストが私たちの生活のあらゆる面に完全な模範を示してくださっていることに驚かされます。もし主にお会いすることができたら、主が接するすべての人々と実にすばらしい完璧な関係を築いておられることを知ることができるでしょう。

他の人々と接していく上で、礼儀として大切なものにはどんなものがあるでしょうか。笑顔はどうでしょう。褒め言葉や肯定的な意見、激励の言葉はどうでしょうか。これらは小さなことかもしれませんが、大切なこととして躊躇せず実行していくべきです。

世の人々はあまり重要視していないかもしれませんが、忍耐と寛容は私たちが同胞と接していく際に培っていくことのできる最もすばらしい特質と言えます。スポーツや仕事の面で、また教会において皆さんがこのふたつの偉大な特質を伸ばしていくなら、周囲の人々との関係は良くなり、彼らの生活にすばらしい影響を及ぼすことができるでしょう。

小さなこと

もうひとつ小さなことで留意すべき大切なことをあげるならば、それは同胞に対する小さな奉仕ではないでしょうか。スペンサー・W・キンボール大管長はこのように言っています。

「実際に仕えることによってこそ仕える方法がわかるということを、私は経験から学んだ。私たちは同胞のために働くとき、そのことで同胞を助けることができるばかりでなく、自分自身の問題をも新しい観点から眺めることができるのである。私たちは他人のことにもっと関心を向けるようにすれば、自分自身のことで思いわずらう時間は少なくなる。……神は私たちを心に掛け、私たちを見守っておられる。しかし、神が私たちの必要に応えられるのは、普通の場合、人を通してである。それだからこそ、私たちが神の王国で互いに奉仕しあうことが大切なのである。」(『小さな奉仕の業』「聖徒の道」1976年12月号)

神との関係

私たちの霊体を創造された天父は、深い思いやりをもって私たちに個人の成長に欠かせない人格、憐れみ、喜び、知識を持てるようにしてくださいました。実際神の持ちたもう特質の芽を、私たちすべてが受け継いでいるのです。こうした確信があれば、私たちは命じられているとおりに確かに神々となることができます。皆さんはニーファイ人に対して言われた救い主の言葉を覚えているでしょうか。主はこのように言っておられます。「汝らはいかなる人物にてあるべきか。まことに汝らはわれと同じ人物ならざるべからず。」(Ⅲニーファイ27:27)

私たちは、神との関係の中においても進歩成長させてくれる小さな事柄に十分心を留める必要があります。息子のヒラマンに語った予言者アルマの次の言葉に耳を傾けてみましょう。「しかし見よ、お前に言うが、小さくてやさしい事から大きな事がでてくる。」(アルマ37:6)

霊的特質を伸ばそうとする熱意は、他の良くない気持ちから私たちを遠ざけてくれます。また私たちにさらに熱心に祈る気持ちを起こさせ、隣人の欠点に対して今以上に寛大にさせてくれます。また非難の言葉を減らし、愛情豊かな人間にさせてくれます。私たちがキリストのようになることを望んで成長していこうとするのであれば、人生の目標はそういった霊的特質を伸ばすことに置かなければなり

ません。

今日、サタンは些細な事柄は気にする必要はないと大々的に宣言しています。ルシフェルは人々を徐々に欺いていく名人です。実際にはたちまち私たちの肉体を縛り、霊を減ぼしてしまう小さなことを、ルシフェルはまったく害がないかのように仕向けるのです。慎しみのない服装やいかかわしい行ないをごく普通のこととしてとらえさせ、ちょっとした不謹慎な言葉や行為をごく健全なことのように思わせるのです。しかしやがてそのような小さな行為は繰り返し行なわれるようになり、徐々に品位を落とし、ついには想像もできないほどにその人を低下させてしまいます。私はむしろ反対に、悪を克服し霊的な強さを増してくれそうなあらゆる小さな機会に目を向けるようお勧めしたいと思います。私たちは、「自ら信ずること神の前に強く」なるために、「絶えず徳を以て想を飾」らなければならないのです。(教義と聖約121:45参照)

小さな事柄(実際には偉大なものに変わっていくのです)は、私たちがより大きな力を求めてひとつずつ克服していこうとするときに理解力を深めさせてくれます。ただし私たちはそれを謙遜に、そして天父への感謝の気持ちをもって行なっていかなければなりません。

現在の私たちの生ける予言者エズラ・タフト・ベンソン大管長は、十二使徒会の会員だったころ、そのことについて次のように語っています。「天父の子供たちは、本質的には善人である。私は、彼らすべてが内に神々となる可能性を秘めており……善を為すことを望んでいると思っています。」(地区代表セミナー、1973年10月4日、p.3)

私たちは、絶対的な信仰を持って日々生活していかなければなりません。なぜなら、主が約束を守り、主に信頼を置く人々をみ守りたもうことを生活を通して知っているからです。主はこれまで私たちすべてに非常に慈しみ深く接してきてくださいました。ですから私たちは自分にどんな欠点があっても、主が愛してくださると強く確信することができます。

私たちが天父のみ前に永遠の生命を願うならば、これらの小さなことを決しておろそかにすべきではありません。これらのことを心から証いたします。□

*この記事は1986年10月26日に行なわれたブリガム・ヤング大学における説教を短くまとめたものです。

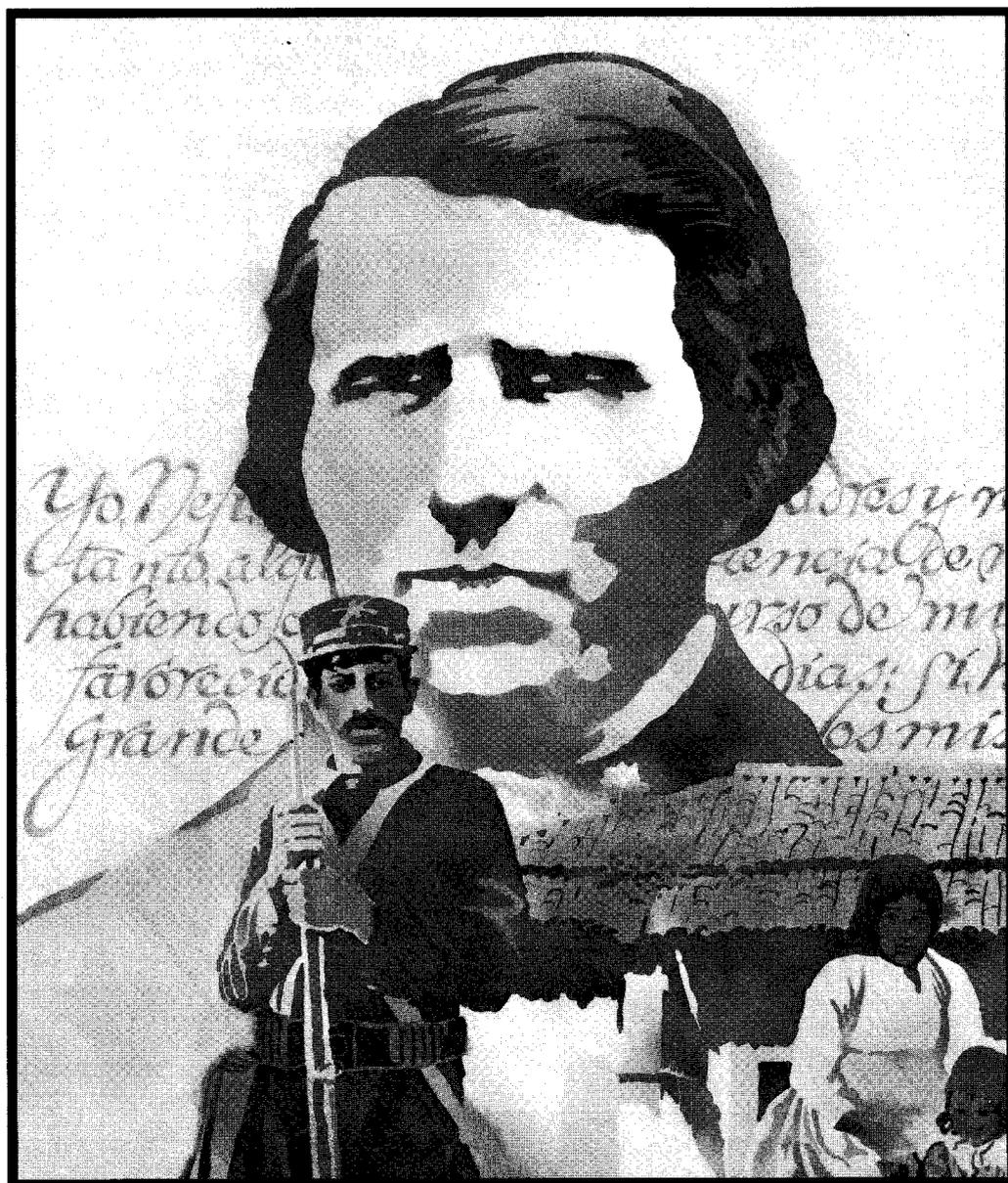
改宗しそ
もなかつた
改宗者

ダニエル・ウェブスター・ジョーンズ

Daniel Webster Jones

ジャック・マカリスト

ミズーリ州出身の孤児が成長し、やがてメキシコで教会発展の基礎を築き、またモルモン経をスペイン語に翻訳するという大事業を開始したのでした。



11 歳のときに孤児になったダニエル・ウェブスター・ジョーンズが、ミズーリ州の家をあとにしてメキシコ戦争に向かう志願兵の一団と共に合衆国西部に向かったのは、1847年のことでした。「かけ事、ののしり、けんか、その他あらゆる粗野な行ない」が日常茶飯事であったと、ダニエルは後にその自伝「インディアンの中で40年」の中に書いています。そういう意味では少年時代のダニエル・ウェブスター・ジョーンズは、後に教会に加わることも、アメリカ・インディアンの中で40年にもわたって伝道することも、スペイン語の公式な訓練をほとんど受けずに、初めてモルモン経をスペイン語に訳すという事業の片翼を担うほどの人物になることも、およそ考えられないような少年でした。しかし、今になって考えてみれば、ダニエルこそ、そうしたことをことごとく行なうためにうってつけの人物だったのです。

ダニエルは自分の幼いころについては多くを語りませんが、そのころすでに神に対する強い信仰を抱いていました。志願兵としてメキシコで過ごした3年の間に、ダニエルは「様々な面で、当時の軍隊にはごく普通だった野卑で無分別な生き方もしてみた」のですが、それでも「強い酒やその他の悪習には」手を染めないようにしていました。「そうしたもののために友人たちの生涯が台無しになっていくのを自分の目で見えていたからです。」

そのころの生き方を振り返って、ダニエルはこう言っています。「私は罪悪感を感じ、何が正しいのか、どうやって神に仕えたらよいのか、私ができるように助けてくださいと、たびたび真剣に神に祈ったものです。欺かれることなく、はっきりと知りたいのです、とお願いしました。」また、漠然としたものながらも、当時の人々にも予言者はなくてはならず、「聖書しか与えられずに放っておかれる」ことは間違っているという気持ちは持っていました。

ダニエルは1850年には、大きな隊商の一行と共にメキシコを出てソルトレークシティに向かいます。その途中、銃の事故のためにひどい傷を負ったのですが、なんとか生き延びてようやくのことで仲間にソルトレークシティの南にあるプロボ近郊の末日聖徒の定住地まで連れて行ってもらいました。

当時、聖徒たちは旅行者からよく物笑いの種にされていました。しかし、ダニエルは自分の友人の中に教義と聖約を読んでそれを笑い物にしている者がいることに気づくと、自分が祈りの中で現代の啓示を求めていたことを思い出したのです。ダニエルは仲間と離れ、ある末日聖徒の家族と行動を共にすることにしました。そして傷の快復に合わせて、福音の研究を始めたのです。当時を思い返してこう言っています。「だれもが親切で、皆強い確信をもって私に接

してくれました。私は長老たちの説教を聞き始め、やがて下した結論は、ふたつにひとつ、すなわち、この長老たちは正直な人物で自分たちの説教の内容が真実であることを承知しているか、それともよっぽどのうそつきか詐欺師のたぐいかのどちらかであろうということでした。私はできることならだまされたくないものと心に決めていましたので、非常に細かく観察を始めたわけです。」ダニエルが特に心を動かされたのは、当時頻繁に戦いがあったにもかかわらず、末日聖徒たちがインディアンに対して敵対心を持っていなかったということでした。

モルモン経について初めて知ったときにも、「私にはそれをすんなりと信じることができました。以来これまで自分の心の中で、モルモン経が真実であることを疑ったり、ジョセフ・スミスが予言者であることを疑ったりしたことは、記憶にありません。私が疑問に思ったことは、モルモンはうそ偽りのない人々か、そして自分もそのような人間になれるか、ということだけでした。」ダニエルは自分もそうなれるという決断を下したとき、アイザック・モーリーのところへ出かけて行きました。アイザックは、オハイオ州では最も早く教会に改宗した人物のひとりです。

1851年の真冬、1月27日のことでした。モーリー兄弟は「おのを抱えて、ちょうど薪を割りにでかけようとするころでした。」モーリー兄弟は「この日が来ることはわかっていたよ」と静かに言うと、そのおのを使って近くの湖に張りつめた厚い氷を割り始めました。こうしてダニエルは教会員となったのです。

それからの23年間はあつと言う間に過ぎていきました。農業に励み、ユート族のインディアンと交易をし、七十人に聖任され、ハリエット・エミリー・コルトンと結婚し、ブリガム・ヤングがサンベテ郡にいるわずかのメキシコ人たちと交わるときには通訳として活躍し、冬の嵐のために手車隊が立往生していると聞けば救援に向かい、そしてインディアンたちとは、教会員としても政府の役人としても、友好関係を保ち続けたのです。

やがて1874年になると、ブリガム・ヤングの執務室へ来るよう呼び出しを受け、そこでメキシコへ伝道に行くよう召されました。「私はいずれこの召しが来るものと思っていました。私はこの伝道の召しが来ることを望みつつ、また恐れてもいたのです」と率直にダニエルが語ったのは、メキシコでの伝道がどれほどむずかしいものか、熟知していたからにほかなりません。このときダニエルとハリリー・ブリジーのふたりが召され、それぞれ準備を進めるよう言い渡されました。また「ヤング兄弟が、モルモン経の抜粋だけでも翻訳してほしいと言った」ため、ふたりは「翻訳の研究を始め、その準備を開始しました。」

ふたりともスペイン語で会話はできましたが、ダニエルは「だれかスペイン語を母国語とする人がいて、自分たちを手伝ってくれたらどれほど助かるか、とよく考えていました。」その数か月後、ブリジー兄弟がスペイン語を話すミラトン・G・トレーホーという旅人に出会いました。この人はフィリピン群島で教会についてのうわさを聞き、教会について調べるためにユタに来ていたのです。ミラトンはまもなくバプテスマを受け、ダニエルの助けと励ましを受けて、モルモン経の抜粋をスペイン語に翻訳する仕事を開始しました。

1875年、ダニエルはヤング大管長にあてて、伝道に出かける準備が完了した旨を書き送りました。ヤング大管長の認可を受けたダニエルは、すぐにスペイン語版の初版の印刷のために支払う500ドルを調達しました。

後にヤング大管長と話をしているとき、ダニエルは、スペイン語を理解することのできる教会幹部がひとりもない中で、翻訳が正確であるということを幹部が納得するかたちで立証するためにどのような方法をとるのか、という質問を受けたことがあります。ダニエルは次のような方法で試すことを提案しました。つまり、幹部がある一書を選び、トレーホー兄弟がその中の一部をスペイン語に翻訳する。そしてダニエルがそのスペイン語の翻訳を英語の原文を見ずにもう一度英語に翻訳し直す、というものです。ヤング大管長はこの提案を受け入れました。幹部の兄弟たちがスペイン語から翻訳したダニエルの訳文を読んだとき、当時副管長だったジョージ・A・スミス長老は「笑いながらこう言ったものです。『私としては〔原典よりも〕ジョーンズ兄弟の文体の方が好きだな。……はるかに理解しやすい表現だし……。』」

しかし、ダニエルが翻訳に関して経験した特別な出来事はこれにとどまりません。彼はこう書いています。

「印刷が開始されたとき、私はブリガム兄弟から印刷に間違いがないかどうかについて全責任を負うようにと言われました。これにはひどく頭を悩まし、印刷原稿を校正するときにはなんらかの方法でどんな小さな間違いも教えてくださいと主にお願ひしたものです。

トレーホー兄弟の原稿は現代文の文体で書かれていました。私が誤りではないだろうかと指摘した部分については、彼は例外なく受け入れてくれました。彼はよく『細かいところまでよく気がつきますね。私よりもスペイン語がわかるのではないですか』と言ったものです。どうやってそうした誤りを識別したかということについては、私はあえて彼に話しませんでした。

私は額の真ん中に細い糸のようなものがあって、それがよどみなく引き出されているような感じを抱いていました。

ところが、何か誤りがあると、その動きによどみが出てきます。それは、ちょうど額を小さな結び目が通過するような感じなのです。私が誤りそのものに気づいているかどうかは別として、私には誤りがあるということだけは確信できましたので、それを同僚に伝えて、訂正してくれるようお願いしたのです。こうして私たちはひとつの作業が終わると、次に同じようなことが起きるまで作業を続けていきました。」

1875年9月、ダニエルはメキシコに向けて出発しました。息子のウィーラー、およびジェームス・Z・スチュワート、ヒラマン・プラット、ロバート・H・スミス、アンモン・M・テニー、そしてアンソニー・W・アイブンスも一緒です。一行は馬に乗り、2,000冊の本を持って行きました。これが「モルモン経抜粋」と呼ばれた本です。

地元の役人との交渉がうまくいかず、幾度となく挫折しかけたものの、ようやくのことでチワワで公開の集を開く許可が下りました。時に1876年4月8日。メキシコ国内で初めての教会の集会がおおよそ500人の聴衆を前にして始められたのです。その後何度となく福音について説教したのち、一行は合衆国へ戻り、1876年7月5日にはソルトレークシティに到着しました。ダニエルは1876年から1877年にかけてメキシコへ2度目の伝道に出かけます。このときにも、トレーホー兄弟、プラット兄弟、スチュワート兄弟が一緒でした。またほかにもルイス・ガルフとジョージ・テリーが同行しました。このときには5人が改宗し、バプテスマを受けました。

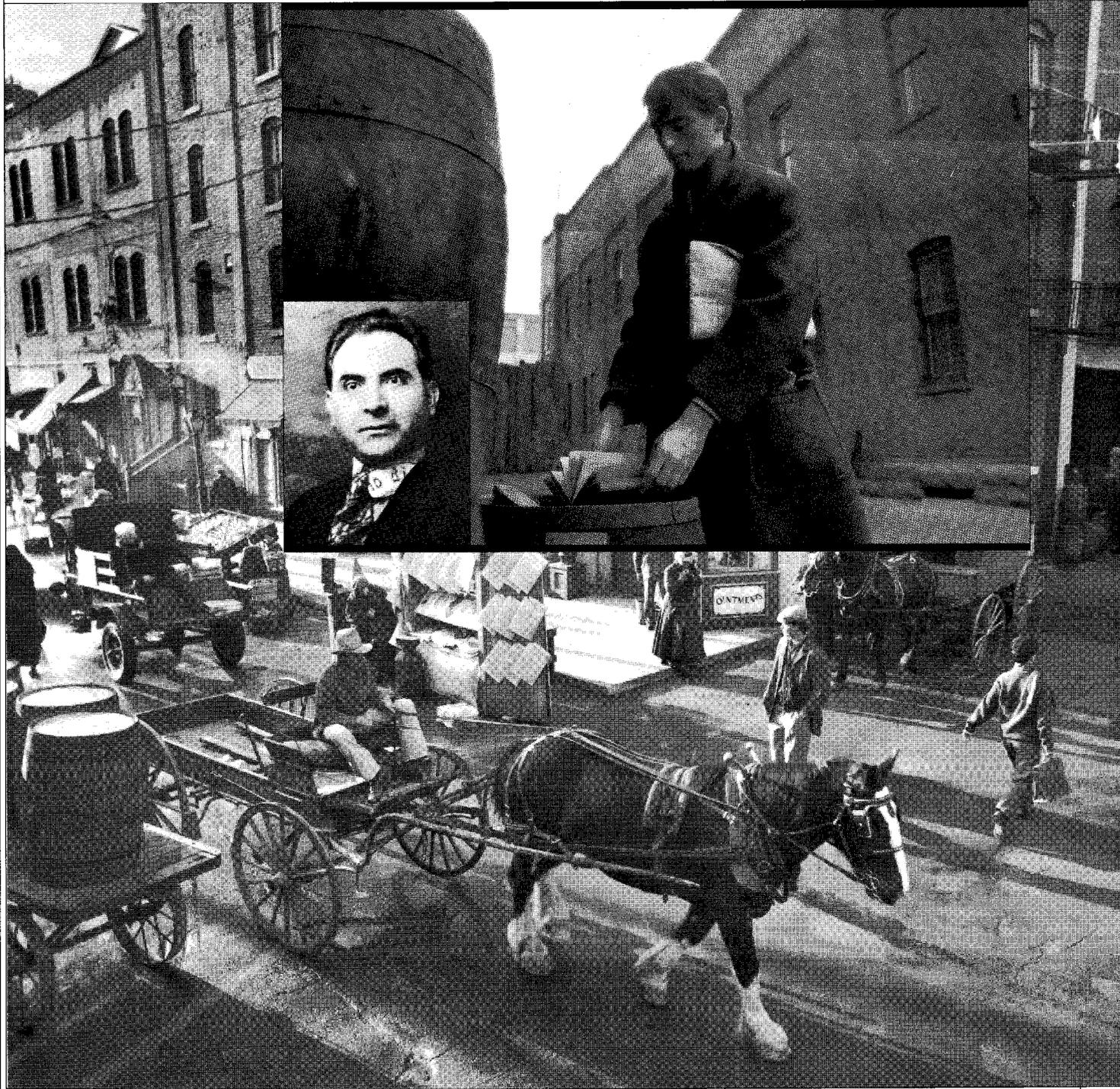
1879年には、十二使徒定員会のモーゼス・サッチャー長老が、スチュワート兄弟とトレーホー兄弟を伴って、伝道部を公式に設置しました。以来、伝道の業は1913年と1926年に政情不安定のために暫定的に中断したときを除き、ずっと進められています。

モルモン経の最初の全訳は、トレーホー兄弟とスチュワート兄弟の手により1866年に完成しています。1907年から1931年まで伝道部長を務めたレイ・L・プラットがエドワード・バルデラスの助けを受けながら、この翻訳に改訂を施しました。後にバルデラス兄弟は教会のスペイン語の主任翻訳者となり、1949年ころには新しく印刷し直すためにこのプラット版に再改訂を施しています。また1969年に始められた改訳は、バルデラス兄弟の手によって1980年に完成し、最近出版の運びになりました。現在はこの改訳版が教会のスペイン語圏の全伝道部で使用されています。

ミズーリ州出身のダニエル・ウェブスター・ジョーンズという忠実で従順な主の僕によってメキシコで始められたこのみ業は、世界中の何万というスペイン語圏の人々の生活に大きな影響を及ぼすこととなったのです。□

「私にはその本を 焼くことはできません」

ドン・ビンチェンツォ・デ・フランチェスカ



以下の記事は、1968年5月号のインブルームント・エラ誌 (pp. 4-7) およびフランチェスカ兄弟自身の手紙から抜粋した特筆すべき改宗談である。その手紙は現在教会の記録保管庫に収められているが、そこには教会に加わるまでの彼の40年間にわたる葛藤^{かつとう}がしたためられている。フランチェスカ兄弟は、1951年にスイス、オーストリア伝道部の伝道部長であったサミュエル・E・プリングハーストによりバプテスマを受けている。

1910年2月のニューヨーク市のあの寒い朝の出来事を思うと、私は神が常に私の存在を心に掛けてくださっていたと思わざるを得ません。その日の朝、イタリア人のための礼拝堂の管理人が、私に主任司祭からの言付け^{ことづ}けを持ってきたのです。その言付けというのは、教区についての重要な話があるが、司祭が病に伏しているため、私の方から司祭宅に出向いてほしいというものでした。

港に近い通りを歩いて行くと、海からの強風にあおられて、灰のいっぱい詰まった樽^{たる}の上に置かれた1冊の本がパラパラとめくれていました。製本の様子から見ると宗教書のように見えます。私は好奇心からその樽の方へ歩み寄り、本を拾いあげ、樽に打ちつけて灰を振り落としました。英語の本でしたが、表紙と扉のページは破れていました。

風の勢いでページがめくれ、私の目にアルマ、モーサヤ、モルモン、モロナイ、イザヤ、レマンなどの言葉が続げまに飛び込んできました。イザヤ以外は聞いたことのない名前ばかりでした。私はひとまず近くで買った新聞にその

●1910年当時、若き牧師であったドン・ビンチェンツォ・デ・フランチェスカ

本を包むと、司祭の家に向かいました。

司祭にお見舞いの言葉をかけてから、私は彼に代わってすべきことをいくつか引き受けました。家路につきながら、私はその本の中の聞き慣れない人々がいったいだれなのか思いをめぐらしました。この本に出ているイザヤとはだれなのか。聖書に出てくるイザヤだろうか、それとも別のイザヤだろうか。

家に着いてから、私はその本に書かれていることを何としても知りたくて、窓際に腰を下ろしました。破れたページをめくり、イザヤの言葉を読んでいくうちに、私はこの書物が将来起こるべきことについて書かれた宗教書であるという確信を得ました。表紙と扉のページが破れているため、この教義を教えている教会がどこなのかはわかりませんが、私は見証者たちの宣言を読んでこの書物が真実なものであるというはっきりした確信を持ったのです。

それから私は、近所の薬局で綿と洗浄液を買い求め、一ページずついいねいに拭きとる作業を始めました。そして数時間かけて残りのページを読み終わりました。その後、私は光と知識を受け、この新たな啓示の出所を深く考えるようになりました。私は幾度も読み返していくうちに、この書物が贖^{あがな}い主の第5の福音書であるという確信を強めていきました。

その日の終わりに、私は自分の部屋に鍵をかけ、その本を手を持ってひざまずき、モロナイ書の10章を読んでみました。そして私は、その書物が神からのものなのか、真実の正しい書物なのか、また伝道の際に四福音書と共にその中の教えを伝えてよいものかを御子イエス・キリストのみ名によって永遠の父なる神に祈ったのです。

海から吹いてくる風に私は自分の体が冷えていくのを感じました。そして心臓の鼓動が早まり、この上ない貴重なものを見いだしたうれしさで心は慰められ、筆舌に尽くしがたい喜びに満たされました。私は、神が私の祈りにこたえてくださったこと、またこの書物は私にとって、またそのみ言葉を聞く人々にとって最も大いなる祝福となるという確信を得たのです。

その後も私は教区内での説教の仕事をしていきました

が、私の説教はその新しい書物からの教えを折り込んだものになっていました。教区の会員たちは、私の教えに非常に興味を示し、他の司祭の説教に満足しなくなっていました。彼らの説教の途中で席を外す会衆も、私が説教壇に立つと最後まで残っているのを見て、同僚たちは私に腹を立てるようになりました。

彼らのいやがらせが本格的になってきたのは、1910年のクリスマス・イブのころからです。その晩の説教で、私は新しい書物からイエス・キリストの誕生と使命について話したのです。すると説教を終えたとたん、数人の同僚が会衆の面前で、私が話したことをすべてに反駁してきて、そして公然と非難したあげく、懲戒処分を求めて私を譴責委員会に引き渡したのです。

委員会に出頭した私に、委員たちはまるで父親がするような忠告をしてきました。それはトラブルの原因を作り、司祭たちの調和を乱したこの書物は悪魔の書であるからすぐに焼き捨ててしまうようにというものでした。それに対して私はこう答えました。「神を恐れる者として、私にはその書物を焼くことはできません。私はこの書物が真実なものかどうかを神に尋ねました。私の祈りはこたえられ、真実であるという確信を得ました。今またこうして神を擁護しながら再び確信を深めています。」私はそのときまた、この書物の出所が明らかになる日が必ず来ること、そして私を譴責委員会に厳粛に抵抗させることになったこの確信に喜びを見いだす日が必ず来るという自信を得たのです。

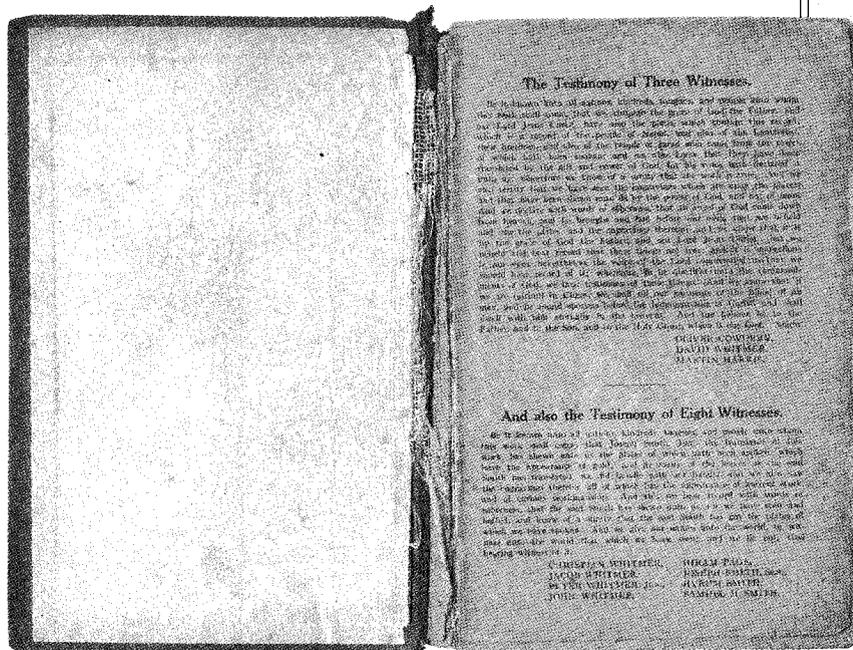
1914年になって私は再び委員会の前になることになりました。教会の役員は態度を和らげ、前回の審理での荒々しい言葉は私を愛するがためのものであり、それによって私が傷ついたとしたらそれは遺憾であると言いました。しかし従順が求められている限り、その書物はどうしても焼いてもらわなければならないというのです。

私は神を怒らせることになると思い、結局その書物を否定することも焼き捨てることもしませんでした。私は役員に、この書物を有している教会が判明しその教会の会員となれる日を心待ちにしていることを伝えました。「もういい、もういい。」荒々しい口調の役員という言葉に続いて、委員会の決定が読みあげられました。その結果、私は教会の司祭の職を失い、それまで得ていた一切の権利、特権を失うことになったのです。

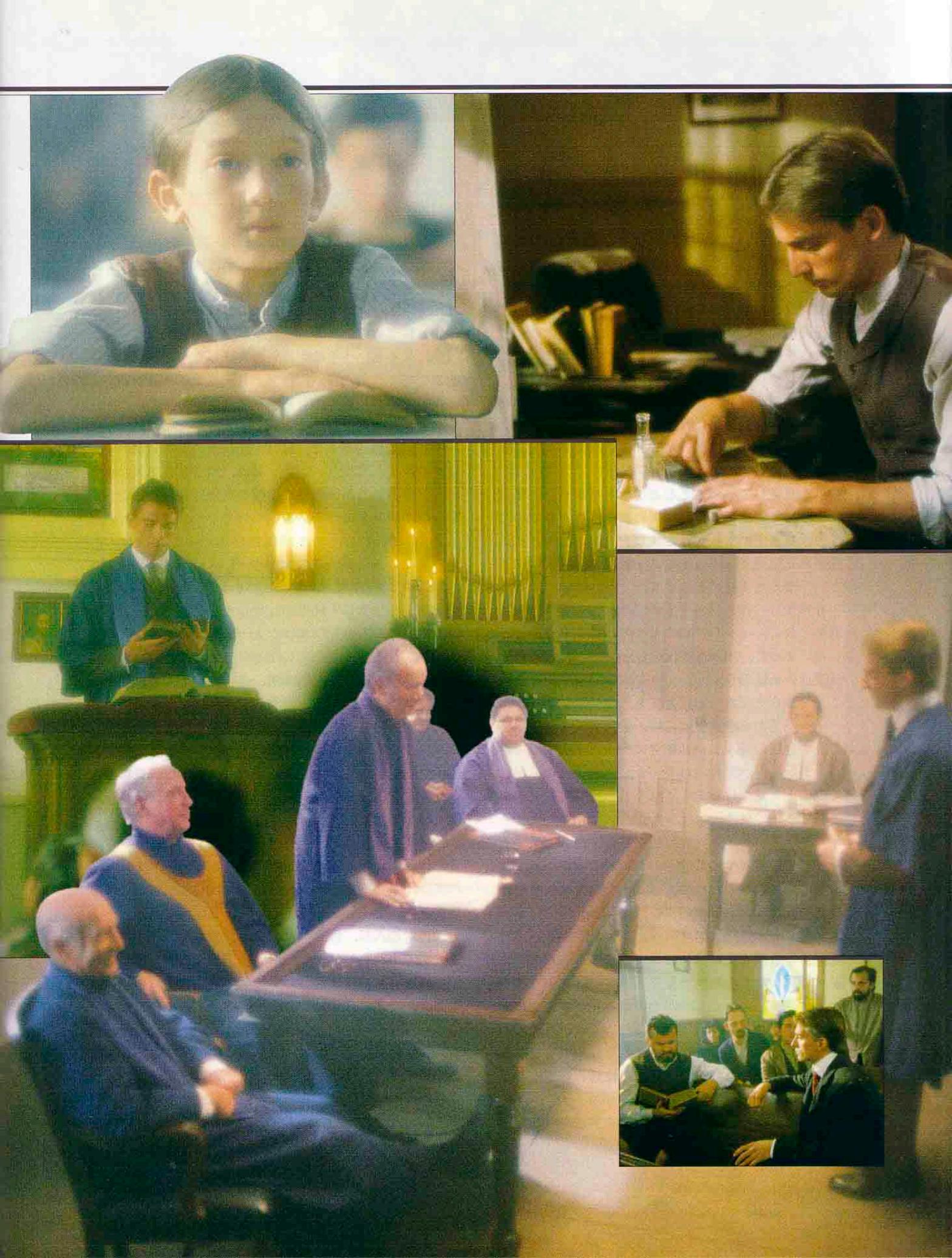
1914年11月、私は故国のイタリアに帰り、軍隊に召集されてフランスで戦うことになりました。あるとき、私は中隊の仲間にアンモン民のことを話してきかせたことがありました。同胞の血を流すことを拒み、そのような大罪を犯すかわりに武器を土に埋めることにした話です。ところが従軍牧師が私のことを部隊指揮官に告げたらしく、翌日私は彼のオフィスに護送されました。部隊指揮官は私にどんな話をしたのか、またその書物をどこで手に入れたのかを尋ねました。結局私は、その書物のことを二度と口にしないよう嚴重に注意を受け、罰として10日間パンと水だけの生活を強いられることになったのです。

終戦後再びニューヨークに戻った私は、前の教会の司祭をしている旧友に出会い、教会の審議会にかけあってくれた彼のおかげで、再び一会員として彼らに加わることになりました。そして私は手始めに、ある司祭の同僚となってニュージーランドとオーストラリアに伝道に行くことになりました。

オーストラリアで、私たちはイタリアから移民してきた人々に会いました。彼らから聖書の中の翻訳の間違いについて尋ねられたのですが、彼らは同僚の返答に満足しませんでした。質問が私に向けられたとき、私は再びアメリ



●フランチェスカ兄弟がニューヨークで見つけたモルモン經



カ人にキリストが現われた話をしました。そのような知識をどこで得たのかを尋ねられて、私は新たに見つけた書物のことを話したのです。彼らにとってそれは意義深いことでしたが、同僚の司祭にとっては聞き捨てならないものでした。結局同僚が私のことを審議会に告げ口したために、私は再び教会を追放されることになりました。

その後間もなくして、私はイタリアに戻りました。そして1930年5月、フランス語の辞書で調べ物をしていたとき、「モルモン」という見出しに目がとまりました。そこをよく読んでみると、モルモン教会は1830年に設立されたこと、そしてこの教会は、プロボで大学(ユタ州のブリガム・ヤング大学)を経営していることなどがわかりました。私は、その書物についての詳しい情報と失われたページを求めて早速大学の学長あてに手紙を書きました。2週間後、私はその手紙が末日聖徒イエス・キリスト教会の大管長に転送されたという知らせを受けたのです。

1930年6月16日、ヒーバー・J・グラント大管長は私に手紙の返事と共に、イタリア語のモルモン経を1冊送ってくれました。そして、本部を英国のリバプールに置くヨーロッパ伝道部の伝道部長ジョン・A・ウィットソー長老にも私のことを知らせておくと伝えてきたのです。数日後、ウィットソー長老から来た手紙には、予言者ジョセフ・スミスのことや金版、モルモン経が世に出ることについて書かれたパンフレットが同封されていました。こうして私は、ようやく樽の上で見つけたあの灰まみれの書物の残りに出会うことができたのです。

1932年6月5日、ウィットソー長老は私にバプテスマを施すつもりでナポリにやって来ました。ところがシシリーですでに革命が起きていたため、パレルモの警察は私が島を出ることを許可しなかったのです。翌年、私はウィットソー長老から、ジョセフ・スミスのパンフレットをイタリア語に翻訳する依頼を受け、1,000冊出版することになりました。私は翻訳したものを、ヨセフ・ゴッセオという印刷屋に持って行きました。ところがその印刷屋が訳文をカトリックの司教のところを持って行ったため、司教はその翻訳物を焼き捨てるよう命じました。私はその印刷屋を訴えましたが、法廷で降りた判決は、印刷屋に対し、原本を返すようにという命令だけでした。

1934年にウィットソー長老が伝道部長を解任されてからは、後任のジョセフ・F・メリル長老と連絡を取り合うよ

うになりました。そして彼は、「ミレニアルスター」の郵送を手配してくれました。これは、第二次世界大戦のため予約が中断する1940年までずっと続きました。

1937年1月、メリル伝道部長の後任リチャード・R・ライマン長老から、ヒュー・B・ブラウン長老と共に彼がローマに来るとい手紙が舞い込みました。それには、私がそこで彼らと落ち合い、バプテスマを受ける旨が書いてあったのですが、戦争のために手紙の配達が遅れ、その指定の期日までに受け取ることができませんでした。

それ以来1949年まで、私は一切教会の情報に触れることはありませんでした。しかし私は、引き続き忠実に教えに従い、時満ちたる神権時代の福音を説き続けました。私は幸い標準聖典を持っていましたのでそれを各章ごとにイタリア語に翻訳し、「エホバは告げる……新たな日の到来を！」といったあいさつ状と共に知人に送りました。

1949年2月13日、私はソルトレークシティの本部のウィットソー長老に手紙を出しました。ノルウェーに行っていて留守にしていたウィットソー長老から返事が来たのは、1950年10月3日のことでした。私は再び、自分は神の王国の律法と戒めを守り、神の僕、息子として忠実に生活してきたつもりであるから、早急にバプテスマが受けられるよう配慮してほしいという内容の長い手紙を書いたのです。ウィットソー長老は早速当時のスイス、オーストリア伝道部のサミュエル・E・プリングハースト伝道部長に連絡を取り、シシリーに行つて私にバプテスマを施すよう指示してくれました。

1951年1月18日、シシリー島にやって来たプリングハースト伝道部長は、エメラザで私にバプテスマを施してくれました。これは、シシリー島での最初のバプテスマとなりました。その後、1956年の4月28日に私はスイスのベルンで神殿に入り、自分自身のエンダウメントを受けました。こうしてやっと私は天父のみ前に出ることができたのです。神の約束は完全に成就されました。ついにこの書物の出所が明らかにされ、信仰の力を満喫できる日が訪れたのです。

□
編集部から。フランチェスカ兄弟は1888年9月23日生まれ。1966年11月18日に死去するまで、その強い信仰のもと、自分のためだけでなく大勢の人々のために神殿の業に携わってきた。

完全な真理

スペンサー・W・キンボール

私たちの天父なる神、エロヒムは、確かに生きておられます。このことは完全な真理です。この地上のすべての人々が、神の特質と力と神ご自身について、知らずに生きているかもしれません。しかし神は確かに生きておられます。また、たとえこの地上の全人類が、神の存在を否定し、信じなかったとしても、神は現に生きておられます。人間が様々な理論をもってしても、神は実在し、神のみ姿、力、そして特質は人間の理論によって変わり得るものではありません。要するに理論というものは、完全な真理の前ではもろく崩れ去ってしまうものなのです。神は生きておられます。そしてイエス・キリストは全知全能の創造者、唯一まことの生命の君、神の御子であります。学者たちは、キリストの実在を否定し、無神論者たちは冷笑しているかもしれませんが、それでもなおキ

リストは生きてましまし、民を命の道へと導いておられます。このことは完全な真理であり、否定する余地はまったくありません。

カリフォルニアの砂漠の中で拾われた腕時計は、スイスの時計職人の手によって作られたものでした。時計の拾い主は、スイスに行ったこともなければ、その時計を作った職人の顔も、時計が作られた様子も見ることがありません。しかしこの時計は、時計を作った職人がいるということを証明しています。もしもその時計が言葉を話し、「この世に時計職人などいない」と偽りを言ったとしても、真実にとって変わることはできません。

神々がこの地球を創造され、現に力をもって、すべてのものを生かしておられます。

この真理は、永遠に変わることのない完全な真理なのです。□

会員伝道

キャロル・ワグナー・タトル

私はさらに、どうアプローチしていったらよいか聖霊の導きが得られるように、また自信を持ってこのモルモン経について話すことができるよう天父に祈りました。

初めて日曜学校の会員伝道クラスに出て、教師がこの責任の大切さを強調するたびに、私は次第に不安になっていきました。

「会員はみな宣教師」という言葉を引き合いに出し、教師はこう続けました。「当伝道部の改宗者の80パーセントは、会員の紹介による人々です。教会の使命の3つの分野のひとつは、あらゆる国民、血族、国語の民に福音を伝えることです。兄弟姉妹、私たちは口を開いて福音を分かち合わなければなりません。」

教師のその言葉は決して耳新しいものではありませんでした。これまで何度も聞いてきましたし、私も確かにそのとおりでであると思っていました。それなのになぜ不愉快な気持ちになってしまったのでしょうか。なぜ神経質になりすぎて会員でない人々にモルモン経を渡すことをためらってしまうのでしょうか。証をすることを躊躇し、人々を宣教師に紹介することを恐れるのでしょうか。

初めてのレッスンに気落ちした私は、会員でない人々にモルモン経を渡すことをなぜためらうのか、福音に対する証を述べることや会員でない友人や隣人を

宣教師に紹介することをなぜ恐れてしまうのかを考えてみました。

そうした恐れを分析することによって、私は自分の生活を大きく変えることになる第一歩を踏み出したのです。聖典や生ける予言者の言葉を学び、主に祈るうちに、私の恐れは自信に変わっていきました。そして6週間続いたそのクラスが終わるころには、モルモン経を7冊配布し、教会員でないふたりの人に証を述べ、隣人を家に招いて宣教師に紹介するまでになっていたのです。では、私がそれらの恐れにどう対処し、克服していったかを紹介しましょう。

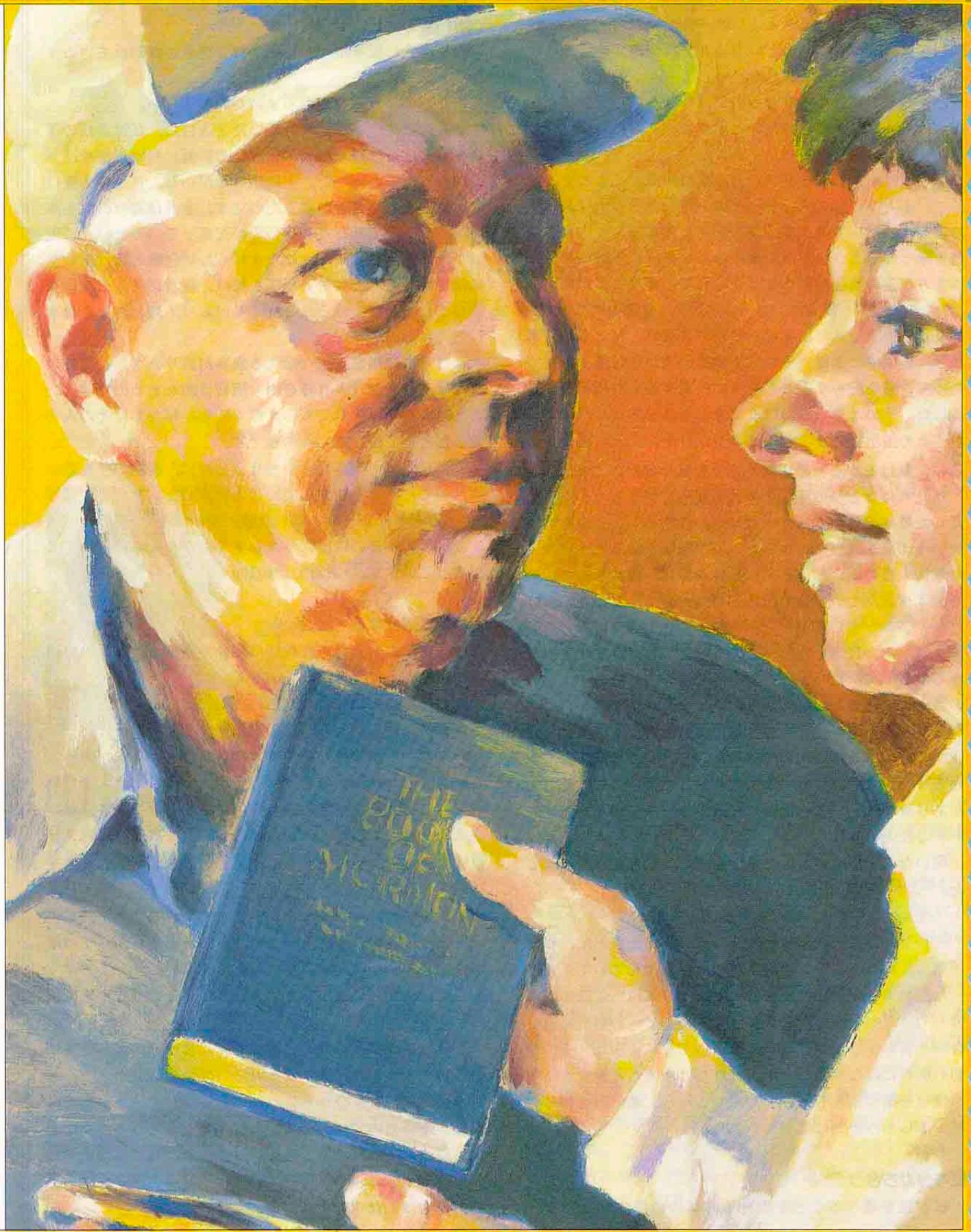
教会員でない人々にモルモン経を配布する

私がモルモン経を配布するのを恐れるのは次の理由からです。

宗教は個人的な事柄であり、人の気分を害するようなことはしたくない。

私の関心をもつばら彼らが教会に加わることにあり、友情を重要視していないと思われたくない。

押しつけがましくして、友情を傷つけない。



私は、だれもが望んでいるもの、生活に取り入れたいと思っているもの（イエス・キリストの福音に対する証と知識）を自分が持っているということを再認識することにより、態度が変わってきました。そして人々が教会に加わることを願って親しくつき合うのではなく、彼らを受容するがゆえに福音を分かち合いたいと思うようにならなければならぬことも悟りました。

押しつけがましさを感じたり、友情が傷つくことを心配している人々に、スペンサー・W・キンボール大管長は次のように勧告しています。「友人たちからまったく永遠の生命を奪ってしまうよりは、彼らの怒りを招く危機に身をさらす方が良い場合があることを忘れてしまうことがある。」（「スペンサー・W・キンボールの教え」p.554）

会員伝道クラスに出席した最初の日曜日、私たちは教師から、翌週中に1冊、そしてその次の週から毎週1冊ずつモルモン経を配布することを主に約束するよう指示を受けました。そのときの私にはまだ恐れがありました。とにかくその指示に従うことにしました。そしてその週の中ごろに、私はモルモン経を渡す相手を見つけたのです。

私たちはひとりの年配の男性を雇っていましたが、勤めだした最初の日から、私は彼に対し性格のいい正直な人だという印象を持っていました。彼が職場を去ることになった最後の日の朝、私は天父に祈りを捧げ、彼にモルモン経を渡すべきだという強い確信を得たのです。私はさらに、どうアプローチしていったらよいか聖霊の導きが得られるように、また自信を持ってこの書物について話すことができるよう天父に祈りました。そしてモルモン経の中に自分の証を書き込むと、話しかけるチャンスを待ちました。

その晩、仕事を終えた彼に私は腰をおろすよう勧め、コップ1杯の水を差し出して尋ねました。「モルモン教徒がなぜモルモンと呼ばれるのか、だれかにお聞きになったことがありますか。」（これは会員伝道のクラスで学んだアプローチの仕方です）

聞いたことがないという彼の返事に、私はこう続けました。「よかったらその訳を説明させてください。」

「ええ、どうぞ。」彼の言葉が返ってきました。

モルモン経について親しく15分ほど話したあとで、私は用意していたモルモン経を手渡し、ぜひ読んでみてくださいと勧めました。それから彼に、祈りの気持ちで読めば自分もそうだったように必ず真実であることがわかるに違いないと言いました。彼は快く承諾してくれました。その後別れ別れにはなりましたが、私たちは今でも友達です。彼の憤りを招くこともありませんでしたし、私の方も押しつけがましかったとは思っていません。

証を分かち合う

私が証を述べることを恐れるのは次の理由からです。

相手の人がまだ証を受け入れる用意ができていないという思いがある。

相手の人に証を拒まれると、自分自身が嫌われているような気持ちになる。

何をどのように証したらよいかわからない。

会員伝道クラスが開かれていた2週目に、私は最初の子供をもうけたばかりの人に、救いの計画に対する証を述べる機会に恵まれました。主に頼りながらも、私は神の愛について証をすることができたのです。それは喜びの涙を誘い、神が確かに私たちを愛してくださっているという否定しがたい気持ちに満たされたすばらしい経験となりました。私はその後もフェローシップを続け、彼女にモルモン経を渡しました。彼女はそれを快く受け取り、読むことを約束してくれたのです。

私たちには福音を宣べ伝える義務があります。と同時に人にはそれを受け入れる自由も拒む自由もあります。たとえ福音を受け入れてもらえなくても、私たちはその人を愛し友として接していくべきです。

主は私たちが福音を分かち合うときに、援助の手を差し伸べてくださると約束してくださいました。また主を信頼し、「声を挙げ」るならば（教義と聖約33：2）「言うべきことはその時その瞬間に与え」てくださるとも約束してくださっています。（教義と聖約100：5－8参照）

宣教師に紹介する

教会員でない人々を宣教師に紹介するのを恐れるのは以下の理由からです。

断られるのではないかという不安がある。

宣教師に対し、どんな反応を示すか心配である。

みんなが不愉快になるのではないかという不安がある。

私自身確かに不安はありましたが、ある日隣の人を家庭の夕べに招きそこへ宣教師も呼ぶことにしたのです。私の友人たちに、宣教師とはいえ彼らも人生を真面目に考え、家族の幸福に心から関心を寄せる普通の若者であることを知ってほしいと思ったからです。

話がはずみ、リフレッシュメントを楽しんだあと、しだいに福音に関する話に入っていました。それから1時間半ほどして、その人は、（今でも彼らとは親しくしていますが）中に私たちの証が書き込まれたモルモン経を手に、帰っていったのです。

会員伝道クラスの最後の週にも私はまた別の経験をすることができました。そしてそれらいずれの経験からも、恐れが人々に福音を分かち合う妨げにはならないという力強い教訓を得たのです。よく祈って準備をするなら、主が自信を持たせてくださることも知りました。今では福音を分かち合うことによって得られるすばらしい喜びと感謝の気持ちをしばしば味わっているのです。□

質 疑 応 答

本誌の答えは、問題解決の一助として与えられたものであり、
教会の教義を公式に宣言するものではありません。

ニーファイ第三書19章に、イエスに祈ったニーファイ人のことが出ていますが、イエスに祈ることは正しいことでしょうか。



回答者

ベス・T・スパックマン

(アルバータ州ミドナポア、
セミナー教師)

上の垂訓の中で、イエスはだれに祈るべきかをはっきりと教えておられます。イエスはこのように言われました。「天にいますわれらの父よ。」(マタイ6：5-13参照) またニーファイ人に対しても同様の指示を与えられます。(IIIニーファイ13：5-13参照) 御父のみ名は神聖なものです。私たちが主のみどころが行なわれるようにと祈るのは御父に対してです。旧世界においても新世界においても、私たちの模範者イエスは導きと教えを施していた間常に御父に祈りを捧げられました。

しかしニーファイ第三書の19章には、イエスの弟子たちが直接イエスご自身に祈られたと記されています。(18節、24-25節、30節参照) 彼らのこうした行為を解く鍵は、同章22節にあります。ここでイエスは次のように説明しておられます。「かれらがかくわれに祈るは、われがかれらと共に居る故なり。」イエスがこう言われたのは、弟子たちの幸福を願って御父に祈っておられたときでした。(19-23節参照)

明らかに、イエスを面前にした弟子たちの祈りはイエスご自身に受け入れられるものでした。

ブルース・R・マッコンキー長老は、キリストに対する「特別な思いを強めていくあまり直接キリストに祈ってしまう」誤った会員たちがいることを指摘しながら、神会のおひとりずつと私たちのあるべき関係を明確に説明しています。マッコンキー長老はキリストに直接祈ることは誤りであると言っています。私たちは御父に祈るべきであり、祈りがふさわしいかどうかによって御父から答えを受けるのです。私たちは神会の中のおひとりだけに特別な気持ちを抱くようなことはすべきではありません。マッコンキー長老は神会のすべてのお方に敬虔な思いを持つよう指摘しています。(「主と私たちの関係」参照。ブリガム・ヤング大学における1981-82年度ファイヤサイドおよび礼拝説教より)

また、異言を語る賜や慰めの賜、知識や記憶力の賜など聖霊の特別な賜を願うときでも聖霊にではなく、御父に祈るべきです。御父は導き手、絶対的な存在、究極的な力の源なのです。

私たちとキリストとの関係や御父への祈りについて考えるとき、前世の生活に目を向けてみると良いでしょう。御父の計画が提示されたとき、私たちは自主的に賛否の気持ちを示しました。ルシフェルは自分のために力と栄光を欲しましたが、キリストはご自身の知恵と謙遜さをもって栄光と誉れとは御父に帰すべきであることを悟られたのです。そのためにキリストは「祈るときには、こう言いなさい、『天に居ます我らの父よ……』」(欽定訳ルカ11：2)と教えられたのです。□

つる 蔓

ラリー・ヒラー

毎年春になると、私は菜園の土地のかなりの部分を、スクワッシュやトマト、きゅうり、そして特にメロンなどのつる植物の作付けのために確保しておきます。土をよく耕し、種まきの前に日当たりの良い配置を入念に計画します。種まきに十分な暖かさになると、菜園に出て行って、種や苗木を植えていきます。それから、毎日のように作物の生長に注意して水をやり草むしりを行ない、芽の出方、花のつき方、そして実のなり方と、畑から目を離すことができません。

私が菜園を始めて最初に知ったことは、つるをもつ植物のほとんどが、どんな方向にでも伸びていくということでした。特に困ったのは、何かに伝って上へ伸びていくということ

です。ある年は、私の植えたスクワッシュがフェンスを越えて隣の家のりんごの木に巻きついてしまいました。ですからその年の秋には、赤いりんごの実の間からスクワッシュが顔をのぞかせるという奇妙な光景を目にすることができました。

別の年に私は、種々のカボチャを植え付けました。つるは、みるみるうちに生長して、フェンスを越え、隣の空家の敷地内に巨大なカボチャを実らせました。重たいカボチャをフェンスを越えて運ばなければならなかった収穫時には、本当に苦労しました。

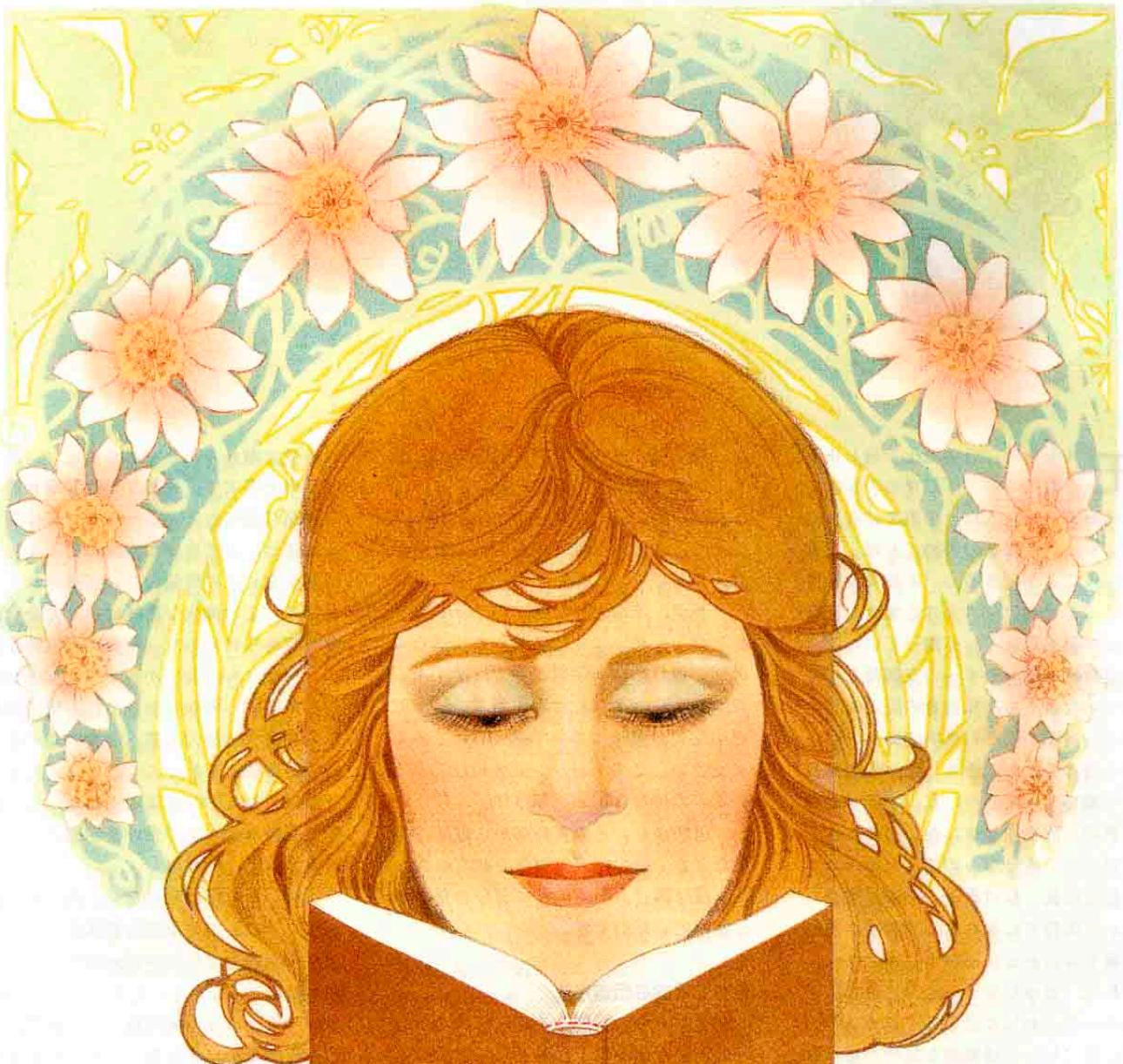
つる植物には、おもしろい特徴があります。驚くほどに生長して、広範囲に広がっていくだけではなく、フェンスや木に次々と巻きつく性質を持っています。しかしそれは、根が水や養分を得られる限度をきちんと守って生長します。そして、その生長に合わせて実がなっていきます。

カボチャを肥沃な土地に作付けして、十分な水と日光と栄養を与えてやると、どこまでも伸びて、大きく生長します。しかし、もしもガラクタの山や木の切り株や、車の車体などにぶつかると、そうした障害物に沿って上に伸びていこうとはしますが、決してその障害物以上の高さには生長することはできません。

ある意味では私たち人間も、この植物と似ているのではないかと思います。私たちは根が吸い上げた養分以上に生長することはできません。何かに巻きつく、そのもの以上に生長することはできません。もし私たちの思いが、この世的なことやこの世の富に執着していたら、私たち自身もこの世のものとなってしまいます。

しかし、もし私たちの思いがキリストの福音に固く結びついており、キリストの教えと儀式に固く根差しているならば、みたまの光と、決して渴くことのない生ける水を与えられ、私たちの成長は限りがなく、豊かな実を結ぶことでしょう。□





なぜすべての人に
モルモン経を伝えな
ければならないのか

ジョイ・E・ジェンセン



「モルモン経はこの地上で最も正確な書物であり、私たちの宗教のかなめ石である。人はその教えに従うことにより、ほかのどの書物にも増して神に近づくことができる。」(モルモン経序文) このジョセフ・スミスの偉大な言葉は、私が伝道部長として働いていた間、また宣教師訓練センターの支部長として働いていたときも、私自身の証となり、またこの言葉が確かに真実であるという確信を得ることができました。伝道部長として働いていたとき、私はあるひとりの宣教師と面接をしました。そのときの会話は、次のようなものでした。

「伝道部長、私は最近、熱心に働きたいという気持ちになれないのです。霊的な経験もほとんどしていません。」

「長老、どうしてそのように感じるのか、もっとくわしく話してくれますか。」

「伝道に対して積極的な気持ちになれないのです。熱心に働けなくなりました。」

「いつごろから、そう思うようになりましたか。」

「3週間ほど前からです。」

「個人的な問題で、何か今ここで話しておいた方がよいことがありますか。」

「いいえ、伝道部長。私は、伝道規則はすべて守っています。毎朝、時間どおりに起床していますし、毎日の聖典学習もしています。今週は旧約聖書を読み進めています。毎日の祈りも欠かさずしていますし、同僚関係もうまくいっています。自分でも何が伝道の妨げになっているのかわかりません。」

「長老は、毎日の聖典学習の中で、モルモン経を読んでいますか。」

「いいえ。」

そのとき私は、彼に何を言うべきかわかりました。

「長老、あなたにひとつのチャレンジをしたいと思います。これからはしばらくの間、毎日の聖典学習の中で、必ずモルモン経から、少なくとも1章ずつ読んで、その聖句の意味について深く考えてみてください。このチャレンジを続けてみて、長老の気持ちを電話で知らせてください。」

2週間後に、その宣教師から電話を受けたとき、彼の悩みは解消されていました。彼は再び、伝道の業に喜びを見いだし始めていたのです。

最も効果的な伝道方法

宣教師たちの霊性とモルモン経の学習との密接な関係は、私にとって以前からわかっていたことでした。ボイド・K・パッカー長老は次のように話しています。

「私たちの霊的成長は、聖典に対する知識と、教義に対する理解度と密接に関係しています。そしてモルモン経の教義ほどわかりやすく、私たちの霊に働きかけるものはほかにありません。」ブルース・R・マッコンキー長老も次のように語られました。「神は、すべての人類がみたまを感じ、心を動かされずにはおれないほどの力強い伝道方法を、私たちに授けてくださいました。それはモルモン経です。」

長い間神のみ手により守られてきたモルモン経の偉大な証と真理が翻訳されて

この世に顕わされたということは、驚くべき出来事です。教義と聖約20章8節から16節に記されているモルモン経に関する記述は、主ご自身が私たちにモルモン経を読むことの価値について話されたことです。この偉大な書物には、完全な福音が収められており、聖典の真実性を証し、神が今もなお、かつて偉大な予言者たちに啓示し導かれたように、現代の私たちを偉大な神のみ業へと導いてくださっていることを教えてくれます。モルモン経は、私たちが忠実であるならば、昇栄に必要なすべての条件を明確にしてくれます。

しかしそれだけではなく、モルモン経にはもうひとつの重要な意味があります。モルモン経のはしがきに記されている言葉がそれです。「そしてこの記録の目的は、イスラエル一家の残りの子孫に、その先祖のために主が為したもうた大きな御業をことごとく示して、残りの子孫……はいつまでも棄てられないということを知らせ……る。」モルモン経について最も重要な記述は、同じはしがきの中に記されている、「ユダヤ人と異邦人ともにイエスは永遠の神なるキリストにましまして、万国の民に現われたもうことを確信させることである」ということでしょう。

確固たる証のかなめ石

神の存在とキリストの神聖を証するモルモン経の力は、神の力なしでは、この地上に現われるはずのなかったモルモン経の存在自体に表われています。モルモ



ン経は、この末日の主のみ業のかなめ石であり、すべてのみ業の基となっています。もしも、このかなめ石が取り除かれたならば、アーチは崩れ落ちてしまうでしょう。真理のかなめ石であるモルモン経の証は、末日聖徒イエス・キリスト教会が、生ける神の唯一まことの教会であり、ジョセフ・スミスが神から選ばれた予言者であり、現代も啓示によって教会は導かれ、神が過去から現在にわたって不変の生ける神であることを私たちに確信させてくれます。

ジョセフ・スミスはモルモン経について、ほかのいかなる書物よりも私たちに神に近づけてくれる書物であると述べています。現にこのことは事実です。モルモン経のみ言葉には、偉大な目的と神聖な力が秘められています。今日の宣教師たちの多くも、神のみ言葉を通して生活を変え、アルマと同じような経験をしているのです。「アルマがこのようにしたのは、自分がその民であるニーファイ人の中を巡ってあるいて、神の道を民に宣べ伝え、民にその義務を思い起させてふるい立たせ、神の道をもって民の間に行われるあらゆる傲慢と狡猾と不和を抑えようとしたためであった。全く純粋な証詞を以てこれを責めるよりほかに民を改心させる道がないと思えたからである。」(アルマ4:19, 下線付加)

教義を理解する

しばらく前、私が数名の教会幹部と共に集會に出席していたときのことで

幹部のひとりがこう尋ねました。「皆さんは、私たちが什分の一の戒めに従うことや、安息日を聖く守ること、また正直であることや、教会の召しを喜んで受け入れることなどの教会の戒めや責任に対して従順になる最も良い方法は何であると思いますか。」その会の結論は、教義をよく理解することでした。アルマもこのことをよく理解していました。「神の道を宣べ伝えるのは民に正しいことを行わせるのに非常に効があって、剣やそのほかこれまで用いたことのあるすべての方法よりも強く人の心を感化するから、アルマは神の道の力を用いる必要があると思った。」(アルマ31:5, 下線付加)

いつの時代でも真理を愛する予言者たちは、神の言葉を求めました。「しかしわが言葉は世界の隅々までも響きわたり……。」(II ニーファイ29:2) モルモン経のみ言葉は、私たちが主イエス・キリストとその贖いのみ業へと導きます。モルモン経は、私たちにジョセフ・スミスが確かに神から選ばれた予言者であることを確信させ、末日聖徒イエス・キリスト教会が唯一まことの神の教会であることを確信させてくれます。

美しきながめ

皆さんは、今までに山登りを経験したことがありますか。ふと足をとめて、今まで登ってきた道を振り返ると、そこには美しい景色が展開されます。高く登れば登るほど、景色は美しく変化していきます。私たちが登り続ける限り、美しい

眺めは、より一層美しい眺めへと変わっていきます。より一層という言葉には、低い状態から最高の状態へと移行していくという意味が込められているように思えます。同じように、私たちは聖書だけではなく、モルモン経も与えられたことにより、より一層救い主イエス・キリストとその贖いに関する知識を増し加えていくことができるのです。主はこう言われました。「見よ、ニーファイの版には多くの事柄刻まれたがこれらは誠にわが福音を更によく見渡し得る事柄などなり。」(教義と聖約10:45) モルモン経には、聖書よりもより一層明確な教義が多く収められています。憐れみと正義の律法、アダムの墮落の教義、自由意志、キリストの贖い、サタンの実在とその誘惑の力、信仰と希望と愛の原則、バプテスマの目的と必要性、幼な子の救いに関する教義、復活の教義などです。

私たちが真理を探し求めているすべての人の手にこのモルモン経を渡さなければならないのは、以上の理由によります。私たちは、ひとりでも多くの人々にこのイエス・キリストの福音により見渡すことのできる偉大な眺めを伝えなければなりません。真心から真理を探し求めている人がこのモルモン経の扉を開くとき、彼らはみたまによって主の末日のみ業を確信し、神よりの啓示を通して真理を確信することができるということを私たちは知っています。「もし誠心誠意でその上キリストを信じながら問うならば、神は聖霊の力によってこの記録が確なもので



あることをあなたたちに示したもうにちがいない。」(モロナイ 10：4)

真心から真理を求めている人々に私たちがすべきことは、ただひとつです。彼らに、モロナイの約束を試す機会を与えてあげることです。彼らはみたまによって神の声を聞くことでしょう。

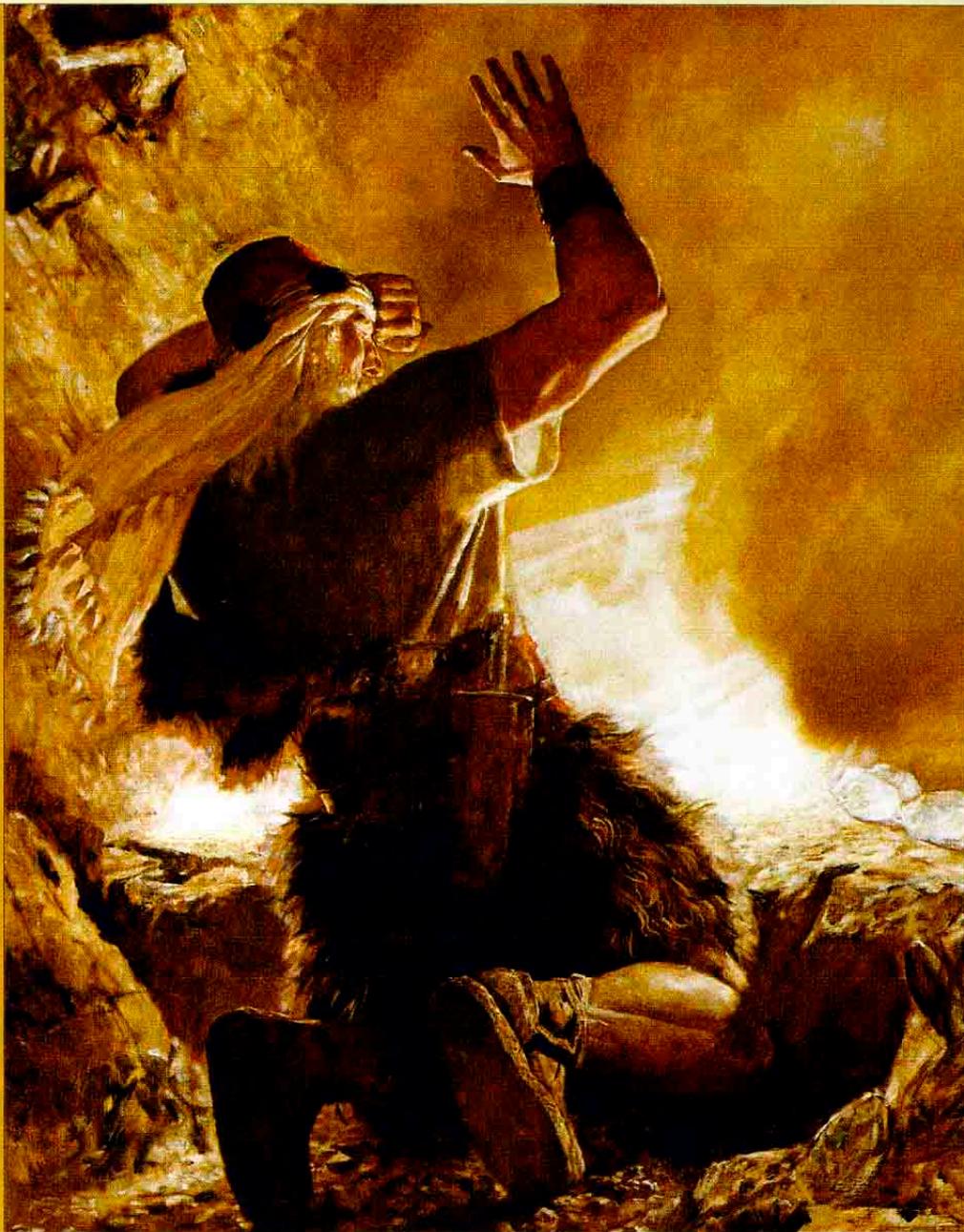
このように真理のかなめ石で

あるモルモン経による伝道は、この末日において、より一層歩みを速め、大勢の人々を真理へと導いています。今こそ、「モルモン経は私たちの宗教のかなめ石であり、人はその教えに従うことにより、ほかのどの書物にも増して神に近づくことができる」というジョセフ・スミスの言葉が確証されたのです。□

信仰がなければならぬ

アーサー・R・バセット

信仰, 希望, 愛という心を強め励ます原則は, モルモン
経の中で幾度となく繰り返し教えられています。





信仰，希望，そして愛とい
う3つの永遠の原則につ
いては，普通新約聖書にあるパ
ウロの教えに関連して扱われま
す。(Iコリント13参照)しかし
ながら，この3つの原則はモル
モン経の中でもたびたび繰り返
して教えられています。

信仰

予言者アルマとキリストの反対者コラホルの対決は，信仰の原則とは何かという問題に一石を投じています。(アルマ30参照) コラホルはアルマに対して，証明もできない信仰などというものに基盤をおいて生活していると激しく責めるわけですが，その過程でコラホルは，自分の生活ははるかに強固な基盤の上に成り立っているのだと言っています。この対決の話を読むと，信仰というものについて語るとき，ひとつの重要な考え方がその基盤になければならないことがわかります。

一体，信仰というものは独立して存在できるものなのでしょうか。愛とて同じでしょうか。「愛する」と言うとき，愛する対象のないまま愛について語るのは意味のないことです。同様に，信仰のある人であっても，その信仰に何のよりどころもなければ，それについて語るのは意味のないことでしょう。普通，信仰というものは，ある人ないしはある物に向けられており，人は皆なんらかの形でそうしたものを持っているものと考えられます。キリストや神を信じる信仰を持っている人も，持っていない人もいるでしょう。予言者たちが信仰の原則について語るときには，このキリストや神を信じる信仰について言っているわけですが，それでも人によっては，外部の人や物ではなく，自分自身に信仰を抱いている人もいるかもしれません。私たちは皆，なんらかの人や物に信頼を寄せています。たとえそれが漠然とした考え方であったとしても，そういうものなのです。

手始めに，信仰というものを信頼と比較してみましょう。

予言者たちが「信仰」という言葉を使うとき、その完全な意味を把握するためには、「キリストを信じる」という言葉を入れた方が適切だと思われます。予言者ジョセフ・スミスが指摘しているように、私たちの信仰を主に向けること、すなわち「主イエス・キリストを信ずる信仰」こそが、聖徒の生活の第一の原則となるものです。(信仰箇条第4条参照)キリストは、私たちが主を知り、理解しようと努力するときに、その模範となります。キリストは私たちに道を示し、あらゆる真理を具体的に実践し、キリスト教徒の働きを明るく照らす光を与えてくださっています。主こそ、私たちが完璧な信頼を寄せているお方なのです。

信仰に基づく価値体系

アルマとコラホルの論争の記録を読むときには、このことを心に留めて読むと、一層よく理解できるようになります。おもしろいことに、コラホルの提示した論点は皆、自分の立場に向けての議論でした。ふたりとも信仰は持っていましたが、アルマの信仰はキリストに向けられていたのに対して、コラホルは自分自身に対して信頼をおいていたのです。コラホルの言い分に従えば、「各々の器量に応じて栄え、各々の力量に従って勝つ」(アルマ30:17)ということになるわけです。

ニーファイが言っているように、聖文を私たちのためと見立てることはいつでも有益なことです。(I ニーファイ19:23) こうした記録を読むときには、**自分自身の生活も吟味してみるとよいでしょう。自分は本当に信仰をどこに**
おいているのだろうか。自分はだれに、あるいは何に頼っ
ているのだろうか。自分は主のみ業に携わることによって
幸福を得ようとしているのだろうか。それとも仕事を通じて
幸福を得ようとしているのではないだろうか。あるいは
自分が何を持っているかによって、幸福を感じようとして
いるのではないだろうか。アルマのような生き方をしてい
るだろうか。あるいはキリストからまったく離れて、自分
自身や自分の能力に過大な信頼を寄せてはいないだろうか。
といったことを自問してみるのです。

アルマは信仰というものの意味について、多くを語っています。たとえば、背教したゾーラム人の中で働いていたとき(アルマ32参照)のことでありますが、私たちに信仰がなければ絶対に到達できない段階があるということを語っているように思われます。これはいわばひとつの永遠の原則です。永遠にわたって私たちについてまわる原則です。私たちがこの世の生涯を終え、キリストのみ前に立って、キリストが存在することが完全にわかったとしても、それでも私たちがキリストとの関係は、キリストを信ずる信仰を

持っているかどうかによって決められる部分が残るでしょう。キリストを知る知識だけでは十分ではありません。ヤコブが言っているように、悪霊もイエスのことを知っていたが、イエスに従おうとはしないのです。(ヤコブ2:19参照)

しかし、私たちが従いさえすれば、知識と信仰とが互いに影響し合うかということがわかるでしょう。

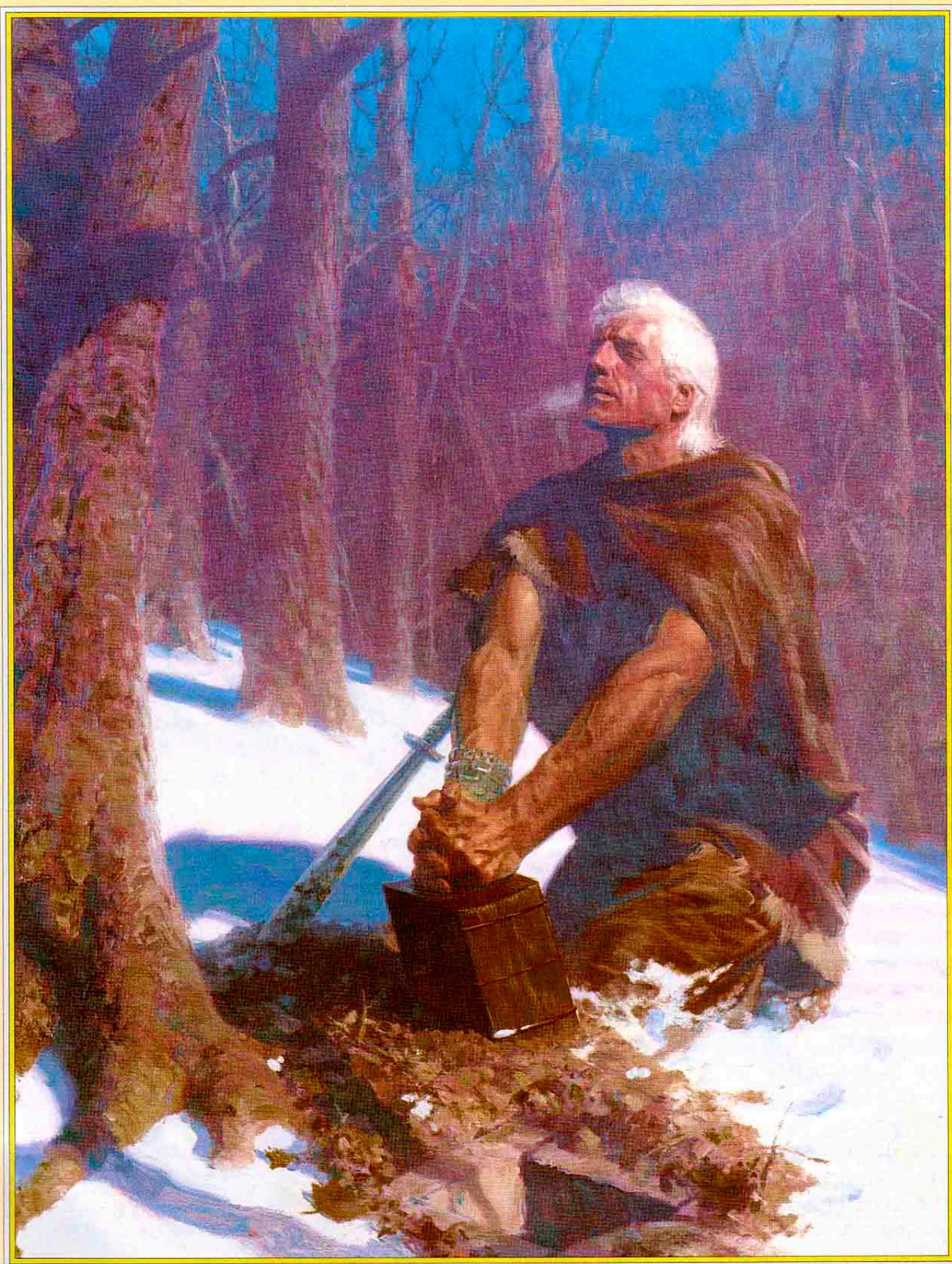
しかし、たとえそうであったとしても、あらゆる面での知識を得たからといって絶えず完璧でいられるというものでもありません。「今、あなたたちはすでにこの光を経験したのであるから、あなたたちの知識は完全であるか。いやそうではない。あなたたちは……その信仰をすててはならない。」(アルマ32:35-36)

いかに高度の教育を受けた人であっても、信仰を抜きにして知識だけをもとにして行動できるような段階に到達できるような人はひとりとしていないのです。

無言の教え

アルマの説教を読むと、モロナイの記録(イテル12)やモルモン^の記録(モロナイ7)と同様、信仰の原則について多くのことが理解できます。しかし、何人かの神の人たちの生涯を研究すれば、おそらくは、一層深く理解できることでしょう。たとえば、戦争中に10年以上にもわたってニーファイ人の軍隊の司令長官を務めたモロナイという人物がいます。ヒラマンの息子ニーファイは、キリストを信ずる信仰が一際深かったがゆえに、森羅万象を支配する権能が与えられました。レーマン人の予言者サムエルは、自分の民を神のもとに帰す助けになりたいとの切実な思いで、すでに敵となっている自分の民の中に入って喜んで死を迎えようとしていました。ニーファイの子のニーファイは、もしサムエルの予言が成就しなかったら殺すという教会の敵の脅しにも、いささかもひるみませんでした。さらにジェレドの兄弟もやはり、信仰の偉大な模範です。この予言者は主のみ前に立ち、キリストを信ずる信仰の力によって山を動かしたのでした。

理論や説教も信仰について多くを教えるはくれますが、人の生涯にはそれ以上のものがあります。モルモン経には信仰深い人々の生涯の物語が数多く書かれています。現代の聖徒と呼ばれている私たちが、こうした人々の生涯の意義について深く思いを寄せ、主と主の示された道に、はるかに強固な信仰の土台を置こうと努力するならば、私たちはこうした聖典の研究をせず一日とて過ごすことはなく、私たち自身の生活も主のみたまによって大きな影響を受けるに違いありません。



希望

3つの原則のうちの第2の原則である「希望」については、信仰と相伴うかたちで、モルモン経に登場する聖徒たちの生活の中に描かれています。キリストを信ずる信仰があれば、そこにはまた人智の計り知れない慰めと平安があります。(教義と聖約76:89参照)絶望はなく、希望が人の心に満ちています。モルモンが言っているように、「あなたたちに希望がなかったならどうして信仰ができるか」(モロナイ7:40)ということなのです。私たちはキリストを信ずる信仰を深めていくにつれ、希望も膨らんでいきます。その希望について、モロナイは次のように言っています。

「すべて神を信ずる者はこの世よりも勝っている世、すなわち神の右手の場所を少しも疑わずに望むことができ、このような望みは信仰から生じて人の心の錨になるものであるから、この錨のために人はしっかりしてびくともせぬようになり、いつも多くの善い行いをして神を崇めるようになることができる。」(イテル12:4)

モロナイの言葉を読むと、希望の原則が理解できるようになります。希望の原則とはつまり、神から受ける確信なのです。これは、神に信仰をおくことによりもたらされるものです。それによって人の心には確信のよりどころが生まれ、そのためにいつでもひるむことなく人のために奉仕をすることができるようになります。希望というものがどれほど強いかということは、おそらくその反対語の絶望と一緒に並べて見ると、一番はつきりするでしょう。今日私たちの周囲には絶望に打ちひしがれている人々がいます。どこに助けを求めたらよいかわからないまま、この世代の多くの人々はすでにあきらめて、ある人は社会から身を引き、またある人は時折出現する自称救い主などと言われる人々の教えに次々に従っていきます。しかし、そのような信仰も遠からず、一層深い不満と失望とに変わっていくのです。私たちの多くはそのような人々を知っています。私たちの周囲に生活していますし、しばしばそうした人々と顔も合わせているのです。

生きながらの死とは

他人に対する信頼や自分の境遇に対する信頼を失った人々は、次第に自分自身に対する信頼も失っていきます。どうやら、人の心の中では、希望というものは信仰と深い関係があるようです。希望がなければ、人は努力する気もなくなります。病院の精神科はそのような人々で一杯です。神に対する希望がなければ、人は安心感のよりどころや価値観を段々と失っていきます。自分自身の問題のことしか

考えなくなり、人を助けることができなくなってしまいます。場合によっては、他人の問題には関心すら示さなくなってしまいます。こういう人々は、肉体の機能が停止するはるか前から、生きながらの死を経験しているのです。現在の自分から逃避しようとして、酒や麻薬におぼれる人も出てくることでしょう。

こういう人々の生活は、キリストに希望を抱いて生きていく人々の生活とは大いに異なっています。そうした人々は、主の助けをいただいて、進んで周囲にいる人々の重荷を自分の身に引き受けます。楽観的な考え方で人生を送り、人が最後に行きつくところは喜びであると考えます。おそらく、その例として最も適切なものは、息子アルマの場合でしょう。若いころ反抗を重ねていたアルマは、ある日突然動けなくなってしまいます。永遠の責苦の苦痛におののき、深い絶望感に襲われます。そして、打ちのめされ、恐怖と孤独とを味わっているときに、父親がキリストについて語った言葉を思い出したのです。そこから解放して下さるお方のことを考えただけでも、平安がもたらされ、心の中が穏やかになっていきました。

「このように心の中で願うと、ごらん、私はもう少しも苦痛を覚えず、再び自分の罪を思い出して苦しむこともなかった。

ああ、この時私の感じた喜びと、私が見た驚くべき光とはいかにも大きかった。まことに、私はこの時、前に感じた苦痛にひとしいほどの喜びに満ちたのである。

わが子よ、お前に言うが、私がある時に感じたほどの劇的な苦痛がこの世にまたとあろうか。またその時に感じたほどの甚しく美しい喜びがこの世にまたとあろうか。」(アルマ36:19-21)

この世に同じような経験を必要とする人々がどれほど多くいるのでしょうか。救い主について、また救い主が教えられた人生の目的について、私たちの持っている知識を単に分ち合うというだけでどれほど多くの人々を助けることができるのでしょうか。私には、アルマが「喜び」という言葉を何度となく使ったのが、極めて重要なことのように思えます。モルモン経を解く鍵の言葉がこれなのです。また新約聖書の全福音書、特にルカ伝全体を通じて、この言葉は中心の主題となっています。これは希望の原則の中でも重要な部分ではないかと、私は考えます。「平安」といったほかの概念とも関係があるように思えるからです。この平安は人智の計り知れないものであって、平和の君からの賜としてもたらされるものです。これは、救い主がエルサレムにいる弟子たちに向かって、助け主のいないままに放っておかれることはないかと約束された、あの助け主と

もおそらく関係があるのでしょうか。私は、福音書で使われている「希望」という言葉の意味について考えるたびに、こうしたことをみな頭に思い浮かべるのです。

モルモン経の中には、役にも立たず意味もない神々に自分の信仰を託した人々の記録が数多くあります。そうした人々は幾度となく絶望感にさいなまれますが、一方で聖徒たちには聖徒たちなりの福利がしっかりと保証されていました。この書物の中には、人間の受けるあらゆる形の災難が網羅されていると言っていいでしょう。ジェレド人の記録にある家族の争いや集団殺りく、また隣人や隣国との抗争、人種の偏見、宗教上の迫害、戦争、政府の腐敗、天災と、実際に人間の知り得るあらゆる問題が登場するのです。

今日世界中の末日聖徒にとって、こうした記録には特別な意味があるはずですが、モルモン経に書かれている様々な出来事を自分の経験と引き比べて見る人も多いでしょう。世界中の聖徒の中には、みずから戦争による破壊と恐怖とを体験した人も少なくありません。人種抗争や宗教的な抗争に巻き込まれたことのある人もいます。ほかにも地震や洪水といった自然の災害のために、恐怖におののいたり、家を失ったりした人もいます。

最後には良い思いが勝つ

こうした試練を体験してきた人々にとっては、モルモン経の中の記録は単に書物の中の言葉以上の意味があります。そうした中であっても、希望や心の平安や楽観的な考え方を持ち続けているからです。このような安心感があればこそ、神の聖徒たちは悪に対抗することができるのです。それは、最後には良い思いが勝利を取め、また愛深い御父が見守ってくださることを承知しているからにほかなりません。絶望し悲観すれば、人は投げ出してしまいかもありません。しかし、聖徒たちはあらゆる苦悩には最終的には目的があり、その苦悩も永遠に続くものではないということを理解しています。だからこそ、ほとんど可能性がないと思われるようなときでさえも、働き続けているのです。

希望を抱くことは、現在、言うことを聞かない子供たちを持って苦勞している親にとっては大きな励ましです。元気をなくしている監督やステークス部長にも、支えになります。その希望の力があればこそ、世界中の末日聖徒が積極的に人生を考え、主と交わる日のことを心から喜んで待ち望むことができるのです。ニーファイ人が主と交わったことが書かれている記録を読むと、主の再臨に伴う喜びを期待する気持ちになります。キリストご自身がこの地を統治されるこの上なくすばらしい生活を、私たちは希望を抱いて待ち望んでいるのです。

愛

おそらく、ある意味では、愛は3つの原則のうちでも最も重要な原則でしょう。(モロナイ7:44)愛という言葉モルモンは「キリストの純粹な愛」と定義しています。さらにまた、「この愛は……永遠につづくものである。従って終りの日にこのような愛を持っている人はさいわいである」(モロナイ7:47)とも言っています。「キリストの愛」という言葉は、ふたつの意味に取れるのではないのでしょうか。ひとつはキリストから受ける愛のことであり、もうひとつはキリストのためにささげる愛です。私たちに注がれるキリストの愛を感じつつ、さらにキリストに似た者となるうとするとき、私たちは同胞に対する奉仕のみ業にいそしむ中でキリストの愛を表わしているのです。

本当の愛とは

モルモンが言うように、愛がなければ、信仰も希望もその意味を失ってしまいます。新約聖書のヤコブも、行ないなき信仰に関する説教の中で同じようなことを述べています。(ヤコブ2)

モルモン経の後半に登場する人々ほど、愛を具体的に行動で表わした人々は多くはないでしょう。父親ならだれでも、アルマが息子たちに与えた最後の教えにその愛を感じることでしょう。(アルマ36-42)宣教師なら、アルマの伝道活動とその祈りにその愛を感じることでしょう。(特にアルマ31:26-35参照)青少年の指導者なら、ヒラマンに「わが子」と呼ばれるようになった二千人の青年兵士との交流をつづったヒラマンの手紙にその愛を感じるかもしれません。(アルマ56-58)教会の指導者ならだれでも、幾多のつらい経験にもかかわらず自分の民のために奉仕し続けたヒラマンの息子のニーファイに、その愛を感じることでしょう。書記として働いている人や承図の活動に携わっている人なら、神聖な記録の抄録のために忍耐強くまた注意深く働いたモルモンやモロナイの努力にその愛を感じるかもしれません。

こうした人々は皆、愛とは何かということについて色々教えてくれています。しかし、おそらくこうしたものの中でも最も的確に愛について語っているのは、救い主がニーファイの民を訪れたときに語られた短い言葉ではないでしょうか。(IIIニーファイ11-28参照)

このとき救い主は憐れみの心で教えられました。ご自分の民のために思って御父に祈られたのです。また、ご自分の民の邪悪さのために涙を流されました。悩める人々のために泣き、ニーファイ人の悲しみをいやされたのです。ま

た、子供たちを祝福し、ニーファイ人のために聖餐式を執り行ないました。私たちはこうしたことから、救い主の愛がどういうものであったのかを、感じ取ることができるようになるのです。そうすれば、人生というものは私たちが知っている以上にはるかに気高いものだということがわかります。おそらく、私たちは心の中で、自分の人生をよりよいものにするための解決策は何か、わかっているのだと思います。そして、救い主の中にその信仰と希望と愛とがひとつに統合された姿を見るのです。

救い主の影響

救い主がニーファイ人を訪れた記録を注意深く読むと、モルモンが定義した愛というものが理解できるようになります。(モロナイ7:45)人々のために長く耐え忍ぶということの意味が、もう少しよく理解できるようになるわけです。私たちは兄弟愛の模範を見、ねたみを抱かない人々を見ています。それが聖徒のあるべき姿でしょう。また真の謙遜の模範を見ています。聖徒ならいたずらに怒ることもありません。邪悪なことを決して考えず、悪を喜ばないのです。本当の愛を持つ聖徒は、真理を喜び、すべてのことを忍び、すべてのことを信じ、すべてのことを望み、そしてこの愛のゆえに喜んであらゆることに耐え忍ぶのです。

モルモンは救い主が訪れた後の時代について次のように書いています。「民はその心に神の愛を保っていたから、全国に何ら不和がなかった。

また、嫉妬、争闘、暴動、みだらな行い、虚言、人殺し、および何らみだりがわしい行いがなかったから、まことに神が造りたもうたすべての民の中でこの民ほど幸福な民があるはずがなかった。

強盗も人殺しもなくレーマン人と言う者もどのような民もなく、みな同じくキリストの子であって、神の王国をつぐ者であった。

……かれらは本当に幸福な民であった。」(IVニーファイ1:15-18)

私たちの生活を豊かにする

私たちはそうした人々の模範に従う必要があります。そして従うということは、そうした人々が行なったのと同じように行ない、そして信仰と希望と、またとりわけ愛とを深めていくことなのです。モルモンは自分の民のためにも私たちのためにも、次のような勧告をしています。

「それであるから、私の愛する兄弟らよ、あなたたちは、神が御子イエス・キリストに真に従う者たちに一人のこら^ず与えたもうたこの愛で自分たちの胸を満すためにありた

けの心をつくして御父に祈れ。これはまた、あなたがたが神の子らとなるためである。神の現われたもう時には神をそのありのままの姿で見るにちがいないから、その時には神に似た者になることができるためであり、また私たちも神のように清められると言う望みを持たんがためである。」(モロナイ7:48, 下線付加)

私たちがモルモン経を読み進めていくときに、どうしたらこうした特質を伸ばすことができるのかと、自問することがあるかもしれません。確かにモルモン経を読んでそれについて話し合うことと、その教えを私たちの生き方の中に取り入れることとは、まったくの別問題です。ここから私たちの挑戦が始まるのです。その教えを理解するには、どんなに短く見積もっても一生涯かかることでしょう。そしてその教えを身につけることは、多くの人々にとってさらにまたむずかしいことなのです。

私たちは何を^もおいても、まず信仰と希望と愛とを持たなければならないということに気づく必要があります。そして、すでにこうした特質を身につけている人々と交わり、教えを受けることもできます。そうした特質をもっと完全に身につけられるよう助けてくださいとへりくだって御父にお願いすることもできるでしょう。というのも、これは御父からのみたまの賜であり、熱心に求める人に与えられるものだからです。また福音の教えに従って生活しながら成長していくときに、私たちの生活にはそうした特質が存在しているという証拠を求めることも可能になるでしょう。

モロナイは別れの言葉を記録するにあたって、次のように書いています。

「それであるから信仰がなくてはならない。信仰がなくてはならないならば、希望もまたなくてはならない。希望がなくてはならないならば愛もまたなくてはならない。

あなたたちに愛がなければ決して神の王国に救われ^{ない}。信仰のない場合もまた神の王国に救われ^{ない}。希望のない場合もまたそうである。

キリストの御許に来てキリストによって全くなれ。すべて神のみこころに背くことを捨てよ。……勢いと心と力とをつくして神を愛するならば、神があなたたちに与えたもう恵みは充分である。」(モロナイ10:20-21, 32)

この言葉は、私たちの時代のためにニーファイ人が残してくれたその教えの根幹をなすものではないでしょうか。救い主を仰ぎ見て、その信仰と希望と愛との模範に従えという勧告の中に、福音の諸々の真理がみな含まれているのです。□

*アーサー・R・バセット：ユタ州プロボにあるブリガム・ヤング大学人文学部の准教授である。

「愛は…… 自分の利益を求めない」

(Iコリント13:5)

目的：すべての人に対して愛の心を持ち、奉仕するようになる。

「律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか」という質問に、救い主はこう答えられました。「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』……

第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。』(マタイ22:36-39)

人を愛することは、場合によっては非常に大きな試しとなります。相手が自分を傷つけたり、虐待する人なら、なおさらのことです。しかし、この戒めはきわめて明快なものです。主ご自身、ほかのすべての原則と同様、この戒めについても私たちに模範を示してくださいました。主は私たちに、ひとり残らずすべての兄弟姉妹に心を開き、受け入れるように望んでおられます。家族や信仰を同じくする人々を愛することはそうむずかしいことではありません。しかし私たちは、嫌いな人や、自分がよく知らない人も愛するように求められているのです。

クリストル・フェヒター姉妹もこの問題にぶつかったひとりですが、彼女は主の助けによってそれを克服しました。彼女はまだ若いころに、政治的な変動によってやむなく故国(現在のチェコスロバキア)からドイツへ移住しました。そして、ドイツで教会について学び、バプテスマを受け、後にアメリカへ渡りました。ユタに住んでいるとき、彼女はある人からひどく傷つけられ、生まれて初めて心に憎しみを覚えました。

「それまでも自分の国を侵略されて、ありとあらゆる恐ろしい経験をしていましたが、人を憎んだようなことはありませんでした。それが悪いことだというのはわかっていましたが、どうしたら自分の気持ちを変えられるかまったくわかりませんでした。」

ある日彼女は聖書を読んでいるときに、マタイ5章44節の言葉に目がとまりました。

「わたしはあなたがたに言う。敵を愛し、迫害する者のために祈れ。」

フェヒター姉妹は、この聖句が自分にとって大切な意味を持つものだと感じました。「自分を傷つけたその人のために祈るなどということは、とても考えられませんでした。私は主の言葉に従いたいと思いました。とにかく憎しみを捨てなければならなかったのです。」その夜、彼女はひざまずいて、自分を傷つけた人の上に主の祝福があるようにと祈りました。

心が少し和らぎました。彼女は次の夜も祈りました。そのときは本当に心を尽くしての祈りでした。すると憎しみはすぐに消え、二度と前のような気持ちになることはありませんでした。そして、主がみたまを注ぎ、ご自身になって人を愛するように教えてくださったことを知ったのです。

マタイ25章31節から46節の羊とやぎのたとえ話の中で、救い主はすべての人を愛することの大切さを説かれました。やぎと言われる人と羊といわれる人の違いは、自分たちとは境遇が大きく異なる人やなかなか愛せない人、すなわち飢えている人、渴いている人、旅人、裸でいる人、病気の人、獄にいる人などをどのように扱ったかという点です。このような人々を愛し、彼らのために尽くした人に対して主はこう言われました。「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」□

訪問教師への提案

1. なかなか愛せなかった人を愛せるようになった経験があれば、それについて話し合う。どのようにして愛せるようになったのかを話し合う。
2. マタイ25:31-36の羊とやぎのたとえ話を読み、話し合う。

(「家庭の夕べアイデア集」pp.57-82, 108-119, 172参照)

モルモン経と 今日の家族

ダーウィン・L・トーマス

モルモン経は、昔の他の社会について書かれたものですが、父親、母親、子供たちが今日何をすべきかについて重要なメッセージを投げかけています



今日多くの家族が重大な危機にさらされています。私たちは、家族が強められなければ社会そのものが災いに遭うと警告されています。

しかし私は、末日聖徒としてモルモン経のみ言葉に大きな慰めを見いだしています。モルモン経は確かに昔の別の社会について書かれたものであり、キリストを証することをその主な目的としていますが、この書物には父親、母親、子供たちがお互いにどのような関係を築いていったらよいかといった大切なメッセージが含まれています。

たとえば、この書物の初めの所には、夫と妻にとって非常に大切な教訓が出ています。リーハイと彼の家族はエルサレムをあとにしたのですが、息子たちはレーバンの版を手に入れるために再びエルサレムに戻りました。父親も母親も非常に長い間心配をし、心を痛めていましたが（I ニーファイ5：6-7参照）母親のサラリアは耐え切れずついに夫に向かって不平を漏らしました。しかしそれは納得できることでした。というのは、母親はずいぶん長い間息子たちに会っていませんでしたし、彼らの身の上を非常に心配していたからです。また特にエルサレムに残してきたものを思うと、荒野での生活はこの上ない惨めなものだっ

たからです。彼女は夫に対して次の3つの不平を漏らしました。(1)「幻にふける人」であること、(2)「受け嗣ぎの地」を失い、「荒野で死んでしまう」かもしれないこと、(3)なによりも息子たちが「死んでしまった」のではないかという不安、などです。（I ニーファイ5：2参照）

このような不平は大きな争いに発展していくことも考えられますし、リーハイは自分のとった行動を弁護し、サラリアに対して不満をぶつけることもできたかもしれませんが。

そのような不平不満のぶつけ合いも考えられたことですが、リーハイは彼女に慰めの言葉をもって応えました。ま



ラモーナイ王の改宗談は、夫を信頼し、夫の幸福を願う美しい妻の物語と言えるでしょう



ず彼は自分が「幻にふける人」であることを認めました。それから彼は、版を取りに息子たちを送り出したのは主の戒めに従ってそうしたことを彼女に再認識させ、主が常に彼を導いてくださっていること、そして神は自分たちがあとにしてきた所よりさらに大いなる受け継ぎの地を約束してくださっていることを話し、そのままエルサレムにとどまっていたら皆滅んでしまったであろうこと、神が必ず息子たちを守りたもうことを証したのです。

つまりモルモン経は私たちに、伴侶が不平を言ってきた場合、それを受けた側は弁解したり責め返したりせずに、慰めの言葉をもって応えるべきであると教えているのです。人が不平を漏らすのは慰めを得たいからなのです。特に、末日聖徒の夫婦にとって、神が導いてくださり、神のみ守りがあるという知識、信仰は、この上なくすばらしい慰めとなります。末日聖徒の家庭がこの簡潔なルールに従っていれば、子供たちは、たとえ両親の間に意見の食い違いが生じて、お互いが弁護し合うのではなく、神への信仰と人々に関心を向けることへの話し合いにより彼らが問題を解決していく姿を目にするはずです。この方法は確かに効果があります。私たちが家族に慰めの言葉をかけると、家族もまた同じ慰めの言葉で応えてきます。こうして幾度となくこのやりとりが繰り返されるのです。

夫に寄せる妻の信頼

リーハイとサラリアの例が、妻に対する夫の思いやりを示すものだとすれば、ラモーナイ王の改宗談は、夫を信頼し、夫の幸福を願う美しい妻の物語と言えるでしょう。

ご存じだと思いますが、モーサヤ王の息子で偉大な宣教師アンモンは、レーマン人の中に入っていき、ラモーナイ王を改宗させるために力を尽くしました。みたまに圧倒さ

れて地に倒れた王を、民は死んだものと思いましたが。しかし後は、彼がまだ生きていると信じ、アンモンに王の所に行行って何かできることがないか見に行行ってほしいと頼んだのです。

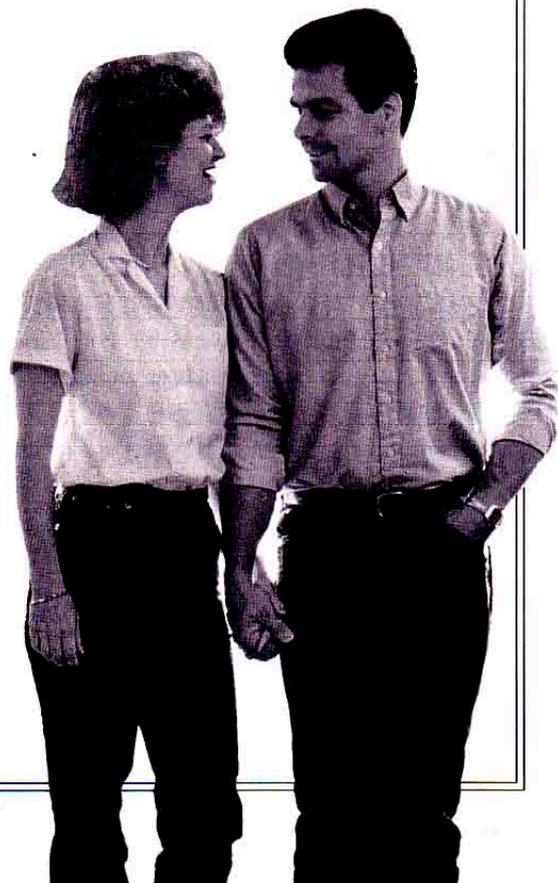
アンモンは後に心配しないように伝え、自分の言葉を信じるかと尋ねました。彼女は「汝の言葉通りになると信ずる」(アルマ19：9)と言ってその言葉を信じました。アンモンは、彼女の偉大な信仰を見て、祝福を授けました。

それから後は一晩中、そして翌日まで夫のそばについていました。王は目を覚ますと後に手を伸ばし、こう言いました。「神の御名に感謝し奉る。妻よ、汝はさいわいである。」(アルマ19：12)

今日、ラモーナイ王のように世にあって霊的に死んでいような夫が大勢います。そのような夫を持つ妻たちは、夫を信頼し、霊のより所に助言を求め、その助言を頼りに暗く長い夜を徹して献身的に夫を見守ったレーマン人の後の例に慰めと力を見いだすことができます。

教える義務

モルモン経には、親子関係についての原則がたくさん出てきます。ニーファイは自分の「善い父母」のことに触れ、自分は「父の知っていたすべての学問の中からいくらかの教えを受けた」(I ニーファイ1：1)と言っています。



子供を正しく育てると
いう、両親の大切な責
任を示すたくさん例
が、モルモン経の中
にあります



イノスは、善き両親と彼らの教えについて触れ、こう言っています。「私イノスは、私の父が父の言葉で教え、また主の愛と誠命とを私に教えたから、父が正しい人であることを知っている。かように父に教えを受けたから、私は私の神の御名を讃美する。」(イノス1:1)

モルモン経のこれらの例から、また他の数多くの例から、「^{なだ}義しい」「^{あがな}善良な」両親は子供たちを教え導かなければならないことがわかります。では親は子供たちに何を教えるべきでしょうか。当時の親たちは、子供たちに言葉や歴史、礼儀を教えてきました。しかしこの書物からも明らかなように、最も繰り返し教えられてきたのはキリストの神聖さとその贖いの業についてでした。

イエス・キリストの大切な使命を息子たちに教えてきたアルマの教え方は、今日の私たちにとっても貴重な価値あるものです。ヒラマンに対し、アルマはこう言っています。「わが子ヒラマンよ。汝はまだ青年であるから、汝が私の言葉を聞いて私に学ぶよう、ひたすらこれを汝にすすめる。」(アルマ36:3) アルマは、キリストとその贖いについて教えることを大きな目的としています。しかも彼は、自分自身のことを息子に話すことによって、すなわち自分自身の改宗と贖罪に関する話をしながらそうしているのです。もし私たちがそれを取り入れ実践したとしたら、親としてアルマの教えの力に驚き、謙遜にならざるを得ないでしょう。そうすれば子供たちも一層私たちに従うようになりますし、私たちもアルマ自身のようにキリストを私たちの個人的な救い主としてもっと深く知りたいと思うようになるはずで

す。モルモンが息子に教えた教え方で最後に記録されているものは、アルマのそれによく似ています。モルモンは周囲の恐ろしい罪悪を見て、イエス・キリストとキリストによる贖いについて教えています。モルモンがモロナイにあてた書簡は、夫や父親、母親、子供たちについての話で始まっています。彼らが完全な墮落へと走ってしまったのは、ひとつには、家族の大切さを否定し、それに背いたからでした。

世の大いなる邪悪について述べたあと、モルモンは最後にこう教えています。「さて私の子よ。キリストに忠誠であれ。願わくは、私が書いたことのためにお前が悲しみのあまり死ぬようなことがなくキリストがお前を慰さめ励ましたもうように、またキリストの苦しみと……その栄光と、永遠の生命を授かる希望とは、お前がいつまでも記憶に留めておくように。」(モロナイ9:25)

この末日のシオンにおける親として、私たちはモルモンの記録から何と多くのことを学べることでしょう。社会が

家庭の最も神聖な部分を著しく否定しているようなときには、まず子供たちをそばに集め、十字架にかかれたイエス・キリストのことを教えるようにしなければなりません。

子供たちの受けるチャレンジ

親としての大切な責任が子供たちに教えることだとしたら、子供たちの責任は何でしょうか。モルモン経では何と言っているのでしょうか。

リーハイと息子のニーファイは、私たちにこの問いに対する答えのヒントを与えてくれています。メシヤの降臨に関する父親の教えを聞いたニーファイはこう言っています。「私ニーファイは……父の語るすべての言葉を聞いたから、私ニーファイもまた聖霊の力によってこのようなことを見たり聞いたりまた知りたかった。聖霊の力とは……およそ神を熱心に求める者たちに神が与えたもう賜である。」(Iニーファイ10:17)

ニーファイは父親の教えに感動しました。しかも彼は父親の言葉を信じただけでなく、父の知っていることを自分の力で知りたかった。つまり彼は聖霊の力によって見、聞き、知ることを願ったのです。そこで彼は主に祈りました。すると彼は主のみたまに捕らえられて高い山の頂に連れて行かれ、そこで祈りのこたえを受けたのです。

この出来事から、私たちはふたつのことを学ぶことができます。ひとつは、子供たちには父親の言葉を信じる責任があるということ、もうひとつはただ信じるだけでなく、父親の教えが真実かどうかを聖霊のささやきによってみずから知る必要があるということです。

以下の例に出てくる子供たちは、両親から以前教わったことを思い起こしてイエス・キリストの福音に改宗しました。

今の世に神によりもたらされたこのモルモン経は、誤解を招くことがないように簡潔な言葉で率直に父親たちに語りかけています



息子アルマは、自分の子供たちに自分自身の罪の贖いについて話すことによりキリストのことを教えました。彼はヒラマンに、自分の罪を思って3日間も苦しんだことを話しています。彼の苦しみは「霊も肉体も一しょにみな消えてなくなってしまえばよい」と思うほどのものでした。(アルマ36：15)その絶望の真ただ中で彼は、「神の子であるイエス・キリストと言うお方が、世の人の罪を贖うためにこの世へ来りたもうと言うことを、私の父が前に人民に予言をしたことを思い出した」のです。(アルマ36：17)自分の罪を悲しむアルマの心は、贖いの力によっておのずと和らいでいきました。

モルモン経の中のもうひとりの予言者イノスは、アルマと同じように父親の言葉に大きな影響を受けています。彼はこう言っています。「ごらん、私は獣を狩ろうとして森へ行ったが、私の父が永遠の生命と聖徒の幸福について教えた言葉を度々聞いたのが私の心に深くしみこんだ。

そこで私は自分の心が飢えるのを覚えて、私の造り主の御前にひざまずき、自分の身と霊のために一心こめて祈りかつ願った。」(イノス1：3-4)一日中、夜になるまで祈ったあと、彼は次のような声を聞いたのです。「イノスよ、汝の罪はすでに許されたれば汝は祝福を受くべし……汝が……キリストを信ずるに由(り)……無罪となれり。」(イノス1：5、8)

アルマとイノスの改宗にあたって、彼らにイエス・キリストを思い起こさせ、贖いの大切さを教えたのはほかならぬ彼らの父親であったという事実は、何と意義深いことでしょうか。

子供たちに与えられている課題は、両親の持っている証が真実かどうかを自分で知ることです。子供たちはふたつの約束を受けています。第一に、父親から受けた正

しい教えは苦難の最中^{きなか}にあつて大きな助けになること、またその教えを思い起こし実行すればイエス・キリストのもとに導かれることです。父親が息子を教え、息子がキリストに従うというこの繰り返しの形式をよく認識するとき、救い主の次の言葉は一層意義を増してきます。「子は父のなさることを見てする以外に、自分からは何事もすることができない。」(ヨハネ5：19)

父親に求められるもの

モルモン経には父親(特に今の時代の父親たち)に対する厳粛なメッセージが載っています。モルモンのように、今私たちは社会にあつて子供への虐待、離婚、妻への暴力、恥ずべき性的な罪などにより家庭の価値が大いに損われているのを目にしています。

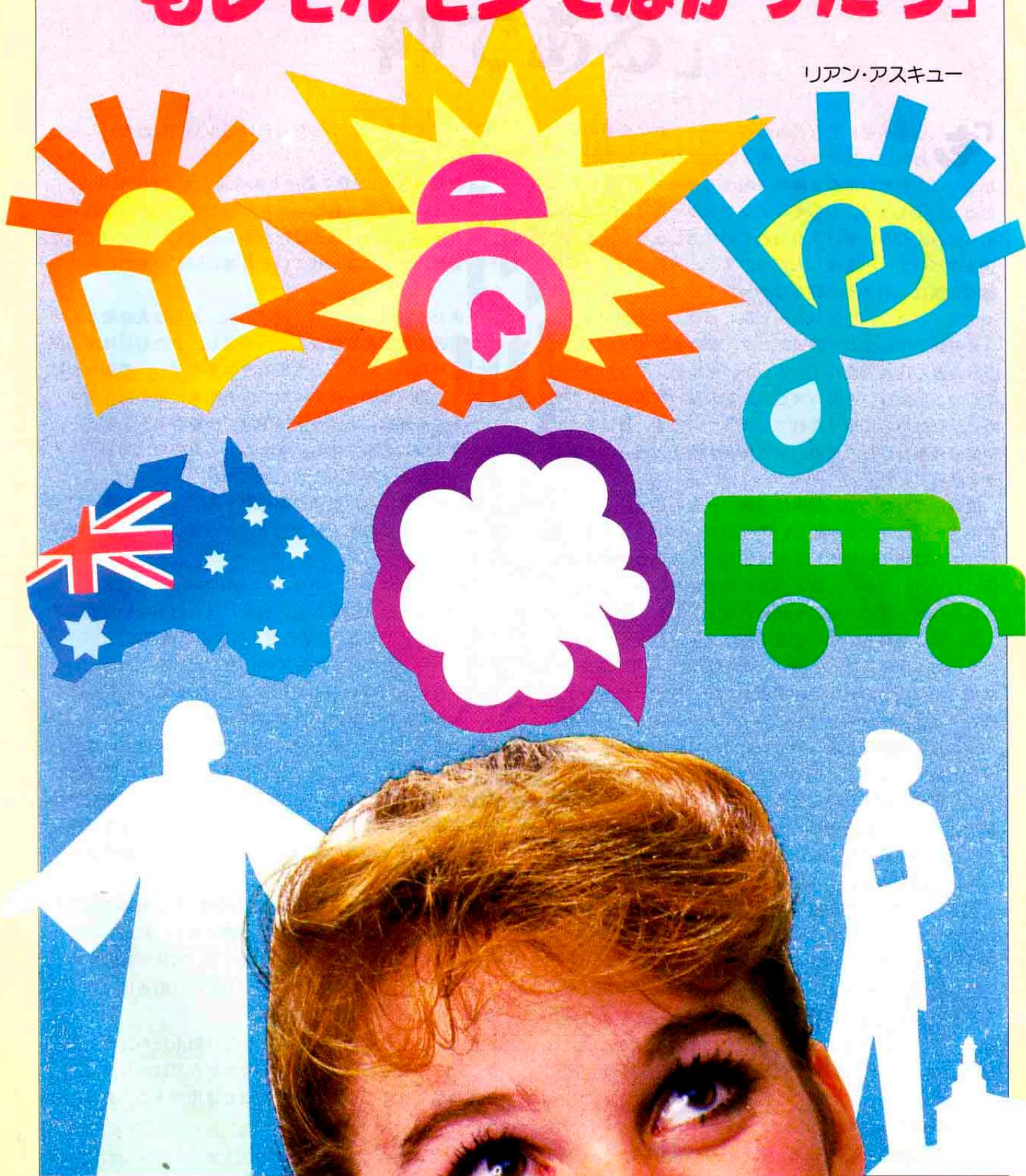
そのような中にあつて私たちは何をすべきでしょうか。そうです。アルマのように、まず子供たちを周りに集め、私たちが贖いを通していかに罪から解放されたかを話してあげるのです。またアルマやモルモンのように、子供たちの霊的な幸福を願って、絶えず祈らなければなりません。また、子供たちがどのような人生を送るべきかを尋ねてきたなら、リーハイやモーサヤのように主に熱烈な祈りを捧げ、子供たちの進むべき道に関して主のみこころを伺うのです。私たちはベンジャミン王のように、子供を教えるという戒めに従わなければなりません。そしてリーハイのように「優しい親の情愛をこめて」論じ、ヤコブのように永遠の生命の喜びを語るのです。さらにニーファイのように聖典について深く考え、子孫のために自分の霊的な経験を書き残していかなければなりません。

家族に対する社会の攻撃から自分を守るために、モルモン経はこう勧告しています。「父よ、汝らの子らを教えよ」と。ニーファイの巻頭の言葉からモルモン^の別れの書簡にいたるまで、その中には父が子供たちを教えている箇所がたくさん出てきます。しかもそれはいずれも偶然ではないのです。今日、多くの末日聖徒の家庭では母親が中心となって子供たちを教えていることから見ても、父親は、この重要な勧告を真剣にとらえる必要があります。これほど適切なメッセージはほかにありません。今の世に神によりもたらされたこのモルモン経は、誤解を招くことがないように簡潔な言葉で率直に父親たちに語りかけています。□

*ダーウィン・トーマス：家族調査研究所の所長であり、ブリガム・ヤング大学で教授として子供の成長と家族関係を教えている。またユタ州スパニッシュフォークステーク部スパニッシュフォーク第14ワード部の監督をしている。

「もしモルモンでなかったら」

リアン・アスキュー



「もしモルモンでなかったら……。」これは今月の私の
お気に入りのフレーズでした。もしモルモンでな
かったら、朝寒い中を5時半に起きてセミナーに行くこ
とはないでしょう。もしモルモンでなかったら、学校でも
もっとみんなから受け入れられていたでしょうし、友達と
週末中パーティーを楽しんだり、また、宗教のことでの様
様な冗談にも耐える必要もなかったでしょう。もしモルモ
ンでなかったら、生活はもっと楽だったろうと思います。

その朝学校にたどり着いたとき、私はイライラして、そ
うえ落ち込んで疲れていました。モルモンでなかったら
こんなことはないと思いました。父の長い家族の祈りのた
めに、私はバスに乗り遅れてしまったのです。母はある扶
助協会の集会に行くため、車で私を学校まで送ることがで
きませんでした。

授業に遅れたので、図書館の裏の近道を通ったところ、
昔のボーイフレンドが新しい美人のガールフレンドと一緒
のところに出くわしてしまいました。私は自分の標準に妥
協したくないために、彼と会うのをやめていたのです。で
もふたりが一緒にいるのを見るのはとても耐え難いもので
した。私はだれもいない部屋に駆け込み、泣きました。

やっとクラスにたどり着いたときは、危うく欠席にされる
寸前でした。その日の連絡事項としてこれからやって来る
長い週末と、オーストラリアのエントランスという、シド
ニーから5時間ほど北へ行ったところにある海岸沿いのリ
ゾート地でのキャンプについての発表がありました。キャン
プにはぜひ行きたいと思っていました。でも、父と母は
私を行かせてくれるかしら。いいえ、なぜなら日曜日は教
会へ行かなければならないし、月曜日は家庭の夕べに出席
しなければならないからです。

数学の授業はとても退屈だったので、もし什分の一を払
わなかったらいくらおこづかいがたまって、どんなものが
買えるか数えあげていました。

翌日の朝、いつものとおり5時半に目覚ましを鳴りまし
た。またセミナーに行く時間です。どうして行かなけれ
ばならないの。どうして毎朝5時半に起きなければいけな
いの。「起きないと遅れますよ」という母の陽気な声が聞
こえました。

その朝のテーマは、「ジョセフ・スミスはあなたのために
何をしてくれたか」でした。私の答えは簡単でした。ジョ

セフ・スミスがいなかったら私はモルモンにはならなかつ
たでしょう。

「教義と聖約122章7節と8節を読んでくれませんか。」
教師が言いました。私はうんざりしながら、聖典を取り出
し読み始めました。最初はただ字を追っているだけでした
が、突然、そこに書かれている言葉に強く引かれ始めたの
です。

「またもし彼ら^{なんじ}を坑^{あな}に投げ入れ、または人を殺す者の
手に引渡し死刑の宣告決るといえども、またもし汝海^{うみ}の深
所に投ぜられ、寄せくる大波汝を呑まんとし、烈風汝の敵
となり、諸天黒闇を集め、風雨火石相共に汝の道を塞ぎ、
なかんずく地獄のあぎと大口開けて汝を呑まんとすとも、
わが子よ汝この事を知れ、すなわちこれ皆汝に善からんた
め、汝に経験を与えんためのものなり、と。」

目に涙があふれ、最後の節に声を詰まらせました。「『人
の子』は一切これらのものの下に身を落したり。汝は彼よ
り大いなるか。」

数日後、私はオペラハウスのバルコニーに立って、シド
ニー湾をながめていました。自分には自由がないなんて考
えたのはなぜでしょう。私の抱えている問題など、イエス・
キリストやジョセフ・スミスのものと比べたら、とても小
さく取るに足りないことなのです。「汝は彼より大いなる
か」と自問したときに、自分は利己的だと思いました。

町の明かりは空の星と同じように美しく輝いています。
「自分の国をとて誇りに思います。」独り言を言いまし
た。「独特の美しさや人々、文化でいっぱいです。美しい植
物や動物、自由を神様に感謝します。そして、永遠に進歩
する世界で唯一の真の教会の一員であることを誇りに思い
ます。」

私の得意のフレーズは、あいかかわらず「もしモルモンでな
かったら」ですが、今では内容が違います。私がもしモル
モンでなかったら、こんなにすばらしい家族や友達を持つ
ことはできなかったでしょうし、人生の目的をはっきりと
理解できなかったでしょう。

ところで、私は什分の一をどれだけ納めたか計算してみ
ました。でもそれは、惜しむ気持ちからではありません。
神様が私に与えてくださった祝福とは比べようもありません
から。□

「成長させて下さるのは、 神である」

神叫他成長

マイケル・コール

私は香港に来たばかりの、失望とホームシックを抱えた宣教師でした。おまけに、すでに知っていて当然聞く必要のない住所を教えてくれた男の人に、感謝を述べるはめに陥っているといた具合でした。これはすべて、私が広東語を理解できなかったからです。

こんな事態になるとは、思ってもみませんでした。私たちの地区の宣教師は、

通勤者が仕事を終えて帰宅するところに、香港スターフェリーボートの近くで街頭展示の伝道をしていました。私も何とかいろいろな人と接触しようと努力したのですが、ほとんど成功しませんでした。中国で二番目に最も広く使われている広東語に未熟であることを、私は痛いほど思い知らされていました。中国人に話しかけることなど不可能に思われましたし、

彼らが話すことを理解するのは、水の上を歩くのと同じくらい困難に感じられたのです。私は話すことも理解することもできなかったので、次第に自分は主にとって価値のない者のように思い始めました。

ちょうど、ウォン氏がフェリーで降りてくるころでした。彼は、とても感じのいい人でした。青いスーツを着て黒い

靴を履いていました。眼鏡は鼻からずり落ちていました。ネクタイを締めてはいましたが、それはこの蒸し暑さにはどこか不似合いなものでした。

声をかけるまでの数秒間、私は懸命に自分に言いかけました。「できる、でき

るんだ。」そして心の中ですばやく祈り、深呼吸をして彼の方へ向かいました。

このような状況に備えて、私は宣教師訓練センターの教師たちから、十分訓練を受けていました。私は黄金の質問を尋

ねて約束を取る練習を何度も何度も繰り返しました。しかし、次の経験から学んだことは、そうした準備をはるかに超えたものだったのです。

「ニー・ハオ・マ（今日は）。」私は声



をかけました。

「はい。」彼は答えました。それは確かに私の知っている中国語だったのですが、宣教師訓練センターで学んだものとは、ほとんど似ていませんでした。

「私は、末日聖徒イエス・キリスト教

会を代表する者です。この教会について以前にお聞きになったことはありますか。」

ウォン氏は質問に答えましたが、例によって、私はそれを理解できませんでしたし

た。

「私の名前は、ガーン・ジェオングローです」と私は告げました。「あなたの名前をお聞かせ願えますか。」

彼の答えたことの大部分は理解できませんでした。彼の名字はウォンという



ことだけはわかりました。彼は自分のてのひらに漢字のウォンという字を書いて、その手をあげて私に見せてくれました。その字は、私にとっては何も意味をなさないものでしたが、私はさもわかったように振る舞いました。

「私たちの教会について少しお話してもよろしいですか。」私は尋ねました。

「わかりません。」彼は言いました。それは私が理解できた数少ない言葉のうちの一つでした。この3週間に私は何度もその言葉を使っていたのです。

私はウォン氏が中国語で書かれた教会の名前を読めるように、自分の名札を見せました。

「ああ、教会ですか。」彼は言いました。

私は微笑んで自分の名札を指差しながら、「はい、私はこの教会の宣教師です」と告げました。「少し教会についてお話してもよろしいですか。」

彼は長々と答えたのですが、新米の宣教師にとってそれはむしろかしいものでした。

「住所を教えてくださいませんか。」私は尋ねました。約束を取るためにできることは、すべてしてみたほうが良いと思ったのです。

「住所ですか。住所を知りたいのですか。」彼は聞きました。

「はい、あなたの住所はどこでしょう。」私はペンとノートを取り出して、自分でその住所を書き留めるか、少なくとも彼に書いてもらおうと用意しました。

「ここで待っていてください。すぐ戻りますから。」彼は言いました。彼の手ぶりのおかげで、私は彼の言わんとすることがかろうじてわかりました。

「ここで待っていてくださいよ。」彼は念を押しました。

「はい、確かに。」私は言いました。どこに行くのかも、なぜ私を待たせるのかも告げずに、彼は私を残して去りました。

ウォン氏は、15分ほどたって通勤者の

人込みの中から現われました。彼は紙を手を持って小走りに近づいてきます。彼はにっこりして手を振りました。

「どうぞ。」彼はそう言って、英語の電話帳の1ページを私に渡しました。末日聖徒イエス・キリスト教会の住所のところが、丸で囲んでありました。

「あなたの教会の住所はこれです」と彼は言いました。

やっとわかりました。ウォン氏は、私が道に迷った外国人で教会を探しているのだと思ったのです。私は自信をなくして、彼の助けにお礼を言いました。

ウォン氏は微笑んで、親しみを込めて私に手を差し伸べました。

「ありがとうございました。」私は言いました。

「どういたしまして。」彼はそう答えるのと去ろうとしました。

「さようなら。」私は言いました。そして、すぐに思いついて「これを差し上げたいのですが。」

私はスーツのポケットに手を入れて、ジョセフ・スミスのパンフレットを取り出すと、両手をそろえて彼に渡しました。中国の作法です。彼も同じ作法でその贈り物を受け取りました。

「少なくとも宣教師訓練センターで学んだかいたったというわけだ。」私は文化と習慣のクラスを思い出しながら、そう思いました。

その晩私は、自分がもっと強められ、成功するようにと祈って眠りにつきました。私は心を尽くして福音を宣べ伝えたかったのです。しかし私にとって、言葉は越えがたい壁のように思われました。それでも数カ月も過ぎると、私にも次第に自信が備わってきました。間もなく私は、その地から転任し、また新しい求道者や同僚、街頭展示の伝道のことが私の心を占めるようになりました。

それから1年して、私は香港の別の地区の巡回宣教師になりました。ある土曜日のこと、私は最初に赴任した地区へ所

用で出かけました。そこの教会堂へ入ると、たくさんの懐しい思い出が浮かんできました。その地区のワード部の友達に会えてとてもうれしく思いました。

集会が終わり、人々は帰って行きましたが、私はもっと友達に会えはしないかなとがめていました。やがて、そのロビーには同僚と私だけになりました。

私たちがその場を離れようとしたときのことでした。教室のドアが開き、スターフェリーの通勤者のあのウォン氏がうす暗い廊下から現われたのです。私は目をみはりました。

「ウォンさん、お元気ですか。」私は興奮して尋ねました。

「コール長老、私はもうウォン兄弟なのです。」彼は完璧な北京語で言いました。

「北京語を話されるのですか。あのフェリーでお会いしたときにあなたのおっしゃることがわからなかったのは当然ですね。」

「それに、あなたの方は、広東語を話されていました。あなたの言葉を理解できなかったわけです。」彼は言いました。私たちは腰を下ろして、しばらく話しました。ウォン兄弟は、1年前にフェリーで私に会ったあと、家に帰り、ジョセフ・スミスのパンフレットを読んだと話してくれました。ただの好奇心から読みましたが、みたまが彼の霊に触れ、さらに詳しく知りたいと思い、伝道本部へ電話をしたところ、ふたりの姉妹宣教師が彼に福音を教えるようになったのです。彼は証を得てバプテスマを受けました。

今まで一度しか会ったことはありませんでしたが、私たちの再会は楽しく喜びに満ちたものでした。私はみたまに満たされ、コリント人へのパウロの言葉の真の意味がよくわかりました。

「わたしは植え、アポロは水をそいだ。しかし成長させて下さるのは、神である。」(Iコリント3:6) □

親 愛なるジョーイへ

明日は、あなたの新しい中学校での3年生第一日目の日。この手紙を書こうと思ったのは、あなたよりも私の方が賢いからというのではなく、中学生生活をすでに体験している私には、明日どんなことに直面するか予測がつくからです。ときどき、正しいとわかっていることでも実行に移すのがとてもむ

ずかしいと思うことがあるでしょう。教会の教えを信じているのは自分だけのように思えてくるのです。みんなと違った態度でいるとみんなから受け入れられないと思ひ込み、みんなに合わせようと思ったりもするんですね。そして、正しいことを守り通すことで笑われたりばかにされたりするんじゃないかと思うかもしれません。そして、自分自身がとても孤独に思

えてくるんです。

常に正しいことを実行するのは大変なことだけど、でもとても大切なことだと思います。それで私の体験をここに書きます。

去年の夏、家を離れ、イギリスのマンチェスターの学校へ通っていたとき、私は毎日バスで町へ行かなければなりませんでした。それから学校へ行くまでに、その町で最も退廃した場所をかなりの距

遠まわり

弟への手紙

ビビアン・ハーマー







離歩かなければなりませんでした。その通りは、バスの停留所のすぐとなりになりました。商店街の壁は、わいせつなポルノのポスターや、ひどい落書きや下品な言葉がいっぱい。バーが数件あり、そのドアが開くたびにいかわしい音楽がかん高く聞こえてきます。歩いていると、中にいる人々が私に向かって大声で汚らしい言葉をかけてきます。学校へ行くために初めて町に出たとき、バスを降りてこの通りを歩いたのでした。通りの半ばまで来ると、私はとても気分が悪くなり、その通りを抜けることができないのではないかと怖くさえなりました。できるだけ目をつぶって通り抜けはしましたが、それ以来私は、この通りを二度と歩くまいと決心したのです。

ただでさえ家や家族から離れると、心配事や今までになかった誘惑がたくさんあるのに、この通りのことでもうひとつ心配を増やすなど考えられないことでした。それで毎日バスを降りると、その通りを避けて遠回りしました。8時の授業に遅れた雨の日の朝など、自分で決心したことなど忘れて近道をしようと思ったりしました。でも、汚れたものに自分の身をさらせばいやな気分になることがわかっていたのでやめました。

毎朝その通りを避けて遠回りをするのが習慣になりました。しばらくして、このようにする理由すら気に留めなくなりました。そんなある日の午後のことでした。友人のボブが、バスの停留所の近くにできた新しい楽器店へ私を案内してくれることになりました。私たちは一緒に大学を出ると、私は無意識のうちにいつもの遠回りを始めたのです。

「どうしたんだい？」ボブは尋ねました。反射的に私は答えました。「その道は通らないの。」

「どうして？」彼は笑いました。

気がつくと、私はそれまでのいきさつを話し始めていました。私は嫌な気分であらたくありませんでした。その通りは私にとって不快なものだったのです。

ボブは私よりも少し年上で、世の中の風潮についてもっとよく知っていました。

また笑われるに決まっていると思い、私はこれ以上自分の気持ちを言うのはばかげているとさえ感じていました。

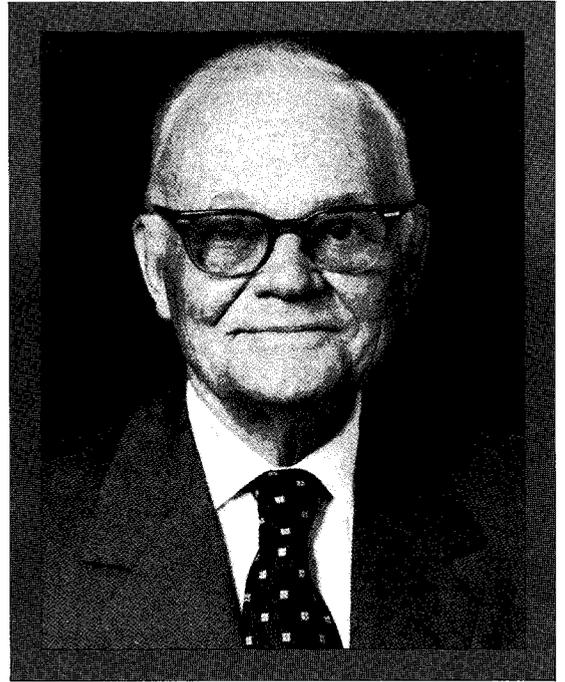
笑われるだろうと思って彼の顔を見あげると、彼はとても真面目な表情でした。数分間の沈黙があった後（私にとってはとてもいやなものでしたが）、彼は初めて大学に来たときに私がしたような決心をしていればよかったと言いました。

「ビビアン、ほくも遠回りをしていればよかったと思うよ」と彼は言いました。「家に帰って家族に会うのが恥ずかしいよ。今じゃ、母親の顔をまっすぐに見ることができないんだ。」私たちはまたしばらくの間たずんでいました。しかし今度の沈黙は心地よいものでした。それから彼は私の腕をとって、一緒に遠回りの道を歩き始めました。私たちは、楽器店へは行けませんでした。別の道を歩いたおかげですばらしい会話のひとつを持つことができたのです。今では彼は私にとってかけがえのない友達になりました。

私には、道徳的、また精神的な清さについて説教する必要はありませんでした。ただ自分の身をさらしてはいけない場所を避けて遠回りをしただけなのです。彼は笑いも、批判もしませんでしたし、私を異常だと思ったりもしませんでした。正しいことを行なった結果、実際に私はボブから尊敬と友情を得たのです。

ジョーイ、学校では大変なこともあるでしょう。でも正しいことや良いことを守って行なえば、だれにも軽んじられることはないでしょう。大切なのは、仲間やクラスメイトがあなたをどう思うかではなく、あなたが自分自身をどう思うかなのです。避けるべきところは避けることができるように、神の子供として自分自身を大切にしてください。友達が悪い冗談や下品な話をするとき、その部屋を出ますか。あなたが信じていることを守り通しますか。そうするならば、賞賛してくれるたくさんの人が、あなたと一緒にその通りを避けて遠回りしてくれることでしょう。□

十二使徒定員会会長 マリオン・G・ ロムニー長老 逝去 (90歳)



1988年5月20日、十二使徒定員会会長のマリオン・G・ロムニー長老が、ソルトレークシティの自宅で老衰のため逝去された。90歳であった。

ロムニー会長の逝去に際して、大管長会は以下のような声明文を発表した。

「マリオン・G・ロムニー会長は、その親切、知恵、福音の学殖、そして信仰によって、教会の主要な任務の上に永遠の足跡を残すでしょう。生涯にわたるその奉仕の業は、国境を越え、世界中の人々の心と家庭に影響を与えました。

教会幹部として過ごした47年の間、ロムニー会長が与えてくれた友愛と勧告に、私たちは感謝の意を表明するものです。」

5月23日、タバナクルで行なわれたロムニー会長の葬儀は、トーマス・S・モンソン第二副管長が司会を担当し、エズラ・タフト・ベンソン大管長が弔辞を述べた。さらに、ゴードン・B・ヒンクレー第一副管長、ボイド・K・パッカー十二使徒定員会会員、F・バートン・ハワード七十人第一定員会会員も長年の同僚であったロムニー長老のために弔辞を述べた。音楽は、タバナクル合唱団が担当した。

前大管長会第一副管長のマリオン・G・ロムニー長老は、著名な福祉計画の中で、1936年のプログラム発足当初から指導的な役割を果たしてきた人物のひとりであった。教会福祉計画の創設当時、ロムニー会

長は過去7年間にわたって、すでにステーク部、地区レベルで福祉プログラムの実績を上げていた。1941年、教会全体の福祉プログラムを担当する実務ディレクター補佐に指名され、1959年から1963年までは福祉部の本部長を務めた。

マリオン・G・ロムニー長老は、1897年9月19日、メキシコのコロニア・ファレスで米国人の両親、ジョージ・S・ロムニーとアーテメジア・レッド・ロムニーの間に生れた。ロムニー長老は、1912年までこの地で学校に通ったが、革命が勃発すると、家財を残したまま、両親と連れ立ってほかの大勢の合衆国市民と共に逃亡を余儀なくされた。

その後数年して、父親がアイダホ州レックスバークのリックス短期大学の学長となり、ロムニー長老は同校を1920年に卒業した。彼は引き続きユタ大学で勉学を修め、1926年に理学士号を、1932年に法学士号を取得し、さらに後年には法学博士号も取得している。1975年にはブリガム・ヤング大学から名誉法学博士号を贈られた。

法曹会に入ったロムニー長老は、ソルトレークシティで11年間弁護士を開業し、様々な地方行政府の顧問弁護士を務めた。1935年から1936年までユタ州の州議会議員を務めている。

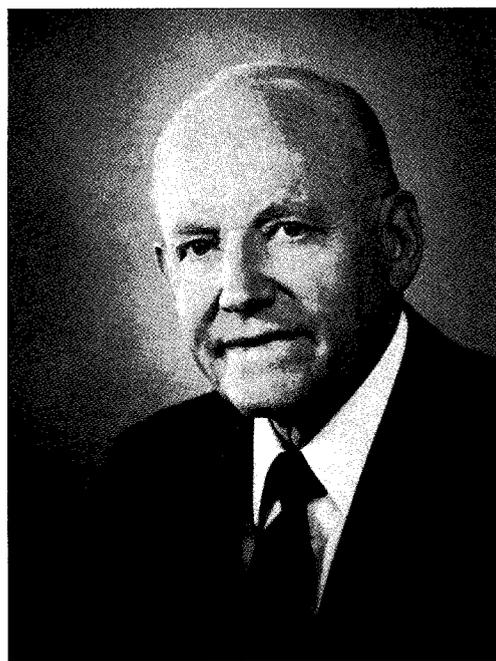
1918年に合衆国陸軍に入隊した後、ロムニー長老は1920年から1923年までの間オ

ーストラリアで伝道の業に携った。1935年にはソルトレーク第33ワード部の監督に召され、1938年にソルトレークシティ・ボネビルステーク部のステーク部長に任命された。

1941年4月6日、ロムニー長老は十二使徒定員会補佐として召され、10年以上その職を務めた後、1951年10月に十二使徒定員会会員として召され、任務を遂行した。1972年7月7日、ハロルド・B・リー大管長の第二副管長として召され、1973年12月26日にハロルド・B・リー大管長が死去するまでその任にあった。次いで、スペンサー・W・キンボール大管長のもとで、引き続き第二副管長として働き、1982年12月2日、N・エルドン・タナー長老の逝去に伴って第一副管長に召された。その後スペンサー・W・キンボール大管長の逝去と共に、第一副管長の任から解任され、前任使徒として十二使徒定員会会長の責任に就いた。ここ数年は健康がすぐれず、職務を果たすのも思うにまかせなかったが、大管長会をはじめ、十二使徒定員会の長老たちは絶えずロムニー長老の自宅に見舞っていた。

マリオン・G・ロムニー長老は、1924年9月12日にアイダ・ジェンセン姉妹とソルトレーク神殿で結婚した。ジェンセン姉妹は1979年にすでに亡くなっている。遺族にはふたりの息子と8人の孫、13人のひ孫、そして3人の姉妹がいる。

ハワード・W・ ハンター長老が 新たに十二使徒定員 会会長に召される



本年6月2日に末日聖徒イエス・キリスト教会十二使徒定員会会長として新たにハワード・W・ハンター長老が召された。ハンター長老は、ソルトレーク神殿で開かれた教会幹部の集会においてエズラ・タフト・ベンソン大管長によってその

職に任命された。長い闘病生活の末、本年5月20日に逝去されたマリオン・G・ロムニー長老の後任であるハワード・W・ハンター長老は、1959年10月から十二使徒定員会会員として、1985年10月からは十二使徒定員会会長代理としての責任を果たしていた。

ハンター長老は1907年11月14日、アイダホ州ボイシで生まれ、ロサンゼルスのスウエスタン法律大学を優秀な成績で卒業した後、南カリフォルニアで弁護士として働いていたが、その後専任の教会の召しを受けた。

新 役 員 の 任 命

4月15日から6月14日までに管理本部会員記録統計課に通知のあった役員の異動（敬称略）

☆高崎ステーキ部

新ステーキ部長：岡田幸男（前任者：北村正隆）

●札幌ステーキ部豊岡支部

新支部長：庄司祐政（前任者：内海宏一郎）

●札幌西ステーキ部琴似ワード部

新監督：守田雅光（前任者：森本公三）

●青森地方部八戸支部

新支部長：木村秋夫（前任者：竹内賢次）

●郡山地方部郡山支部

新支部長：神山俊二（前任者：樋口文男）

●長野地方部松本支部

新支部長：望月孝夫（前任者：浅井喜久雄）

●東京西ステーキ部富士吉田支部

新支部長：御影裕文（前任者：渡辺喜信）

●三重地方部津支部

新支部長：藤本幸広（前任者：神宮司和夫）

●大阪北ステーキ部花屋敷ワード部

新監督：菅原政義（前任者：三浦完二）

●広島ステーキ部五日市ワード部

新監督：林 徹（前任者：成林孝治）

●熊本地方部熊本支部

新支部長：柴田渡（前任者：藤田明智）

●熊本地方部諫早支部

新支部長：村里政則（前任者：竹馬康裕）

●熊本地方部佐世保支部

新支部長：浦山昌志（前任者：中島康貴）



編集室から

《原稿を募集しています》

▶各地のたよりの原稿を常時募集しています。改宗談や日々の信仰生活で得た証（仕事にかかわる証など）、本誌を読まれての感想文（「読者のひろば」）やカットなどをお送りください。また、北は北海道から南は沖縄までの幅広い話題を取りあげたく思いますので、広報ディレクターあるいは各種催し物を担当する高等評議員／地方部評議員の方はレポーターを手配して下さるようお願いいたします。

▶本年11月号掲載分の締切は8月31日（必着）です。投稿には必ず連絡先（電話番号）と教会での責任（役職名）、生年月日を記入してください。お送りいただいた原稿は一部手直しさせていただくことがあります。

▶あて先：〒106東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室 ☎03(444)5264



●全国各地のワード部/支部をご紹介しますコーナーです。

本州最東端の港町

宮古支部

盛岡地方部

こちらは宮古支部です

支部長・仙台伝道部専任宣教師
桑名 宏一



ません。だからといって、みんなが石のように怖そうな人というわけではありません。とても家庭的で温かい支部なのです。「なるほど、何人くらいの人が集っているの?」

だいたい15人くらいですね。そのほかにも、いろいろな事情によって毎週集うことのできない兄弟姉妹もいらっしやいます。1980年に、4人の宣教師がこの地に派遣されてきました。最初は南町という所に集会所を借りていましたが、翌年、西町に移りました。そしてさらに一昨年、現在の新川町に移ったのでした。市内を転々とヤドカリ生活を続けていますので、みんなは「早く大きな支部になって、教会堂を建てて、聖徒の道に出たい」と思っているのです。この小さな支部がいつの日かシオンになれることを確信しています。どうぞ皆さん、ぜひ一度、宮古におでんせ(来てください)。(くわな・ひろかず 仙台伝道部専任宣教師、宮古支部支部長兼任)

心から愛する全国の「聖徒の道」の読者の皆さん。こちらは宮古支部です。「え、宮古支部? ああ、福知山地方部の支部ですね。」

いいえ、名前は同じですが違います。実は1980年から、仙台伝道部盛岡地方部の中で、盛岡支部の付属支部としてひそかに(?)設けられ、去年ついに独立の支部として認められた支部なのです。

「へえ、宮古ってどんなところなの?」
宮古市は本州の一番東側に位置していて、三陸海岸の中程にあります。すぐ近くには「極楽浄土の如し」と言われたところから名づけられた浄土ヶ浜があり、夏になると

当支部のバプテスマフォントに早変わりしたりするのです。ここは冬は温暖で雪も少なく、夏も過ごしやすいところです。そして港町、海産物はとても豊富で、鮭のつかみ取りができる川もあります。

「そうなの。で、どんな支部?」

そうですね。ちょっと宣教師に聞いてみましょう。「ワタシハ、チョットチイサナシブダトオモイマス。」確かにまだ小さな支部ではあります。でも、一人一人はとても強い信仰を持っています。中には家族に聖典を台無しにされた姉妹や離婚を迫られた姉妹、家から出ていけと言われた姉妹など聞いて、その話は涙なしには聞くことができ

モルモン経との 出会いを大切に

前川 淳子



嫌な思いを味わったことか数えきれません。

そんな中で私を育ててくれた母は、私の模範でした。どんなことにもじっと耐える母の姿に私は感動を覚えていました。

生きるだけ生きてみよう、母のように。生きていたという証を子供たちに残してやりたい。そう思うようになったのです。

そんなとき、ふたりの宣教師に出会い、「読んでみませんか?」と1冊の本を渡されました。「お借りしてもいいですか。」これが、私と私の宝としているモルモン経との初めての出会いでした。

早速読んでみると、その中には私がいつも心の中で叫んでいたことへの答えがたくさん書かれていました。返したくないと思

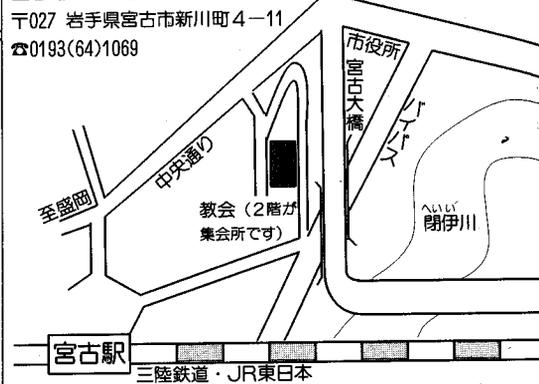
私は、1986年12月26日、バプテスマを受け改宗しました。1年余りが過ぎましたが、モルモン経との出会いは今でも大切な思い出として残っています。

改宗する5年前、心臓発作で3日間生死をさまよいました。

生きるという気力も薄く、精神的にも疲れ果てて、話すこと、歩くこと、食べること、すべてに拒否反応を起こしていました。

ただ、ふたりの子供の姿だけがはっきりと頭に浮かび、離れませんでした。子供たちのために生きなければ、という思いが、うちひしがれていた私の心を奮い立たせてくれました。

結婚して18年、もう「幸せ」という言葉とは縁遠い日々でした。洋上で働いている主人は家にいることも短く、留守を守る家族には世間の風も冷たく、どれだけつらい、



いました。宣教師が再び訪ねてきて、「読まれましたか」と聞かれたとき、「いいえ、まだです」と答えてしまいました。自分でも思いもかけない言葉でしたが、返したくないという気持ちがそのように言わせたのです。あまりいい気持ちではありませんでした。そんな私の気持ちを見抜いてか、宣教師は「どうぞ、差しあげますから、ゆっくりお読みください」と言われたのです。「このような高価なものをいただくわけにはいきません」と言いますと、「そんなに高いものではないですから、どうぞいいですよ」と言われ、あまりのうれしさに、一生この本を大切にしようと思心に決めました。お金では買うことのできない教えが、長い間求め続けてきたものが記されていると思うと、大きな喜びと勇気がわいてきました。今までたくさんの宗教団体に何を勧められても断わり続けてきた私が、不思議なくらい素直な気持ちで、宣教師の話に耳を傾け、生きるすべを知ろうと一生懸命でした。

暑い日も寒い日も、山道を登り、自転車を押して来てくださる宣教師に、感謝の気

持ちでいっぱいでした。あらゆることを犠牲にし、主のみ業のために働いている宣教師たちの謙遜な姿こそ、まさしく神様のみ使いであると感じました。バプテスマを受けたい、神様のみもとに行くための門をくぐりたいという望みは日増しに強くなっていきました。

18年の間、私の肩の上に積み重なった重荷は、簡単に取り去られるものではありませんでしたが、背中をポンとたたかれるような思いで、今までの心の重荷を打ち明けました。共に涙して聞いてくださり、少しずつ心の傷が癒されていくのを感じました。

一時は主人との離婚も真剣に考えていましたが、「家族は永遠に」のスライドを見せていただいて、自分の愚かさに気づき、はずかしく思いました。「家庭の中に」という讃美歌にもあるように、今までの努力では足りないことに気づき、家族一人一人を愛していこうと決心しました。

モルモン経に出会えたこと、生きる望みも失いかけていた私をこれまで導いてくださった主と宣教師、そして姉妹たちに心か

ら感謝しています。

2月7日、娘も8歳でバプテスマを受けました。我が家の小さい貯金箱に、1円、5円、10円と小銭が入っています。そのお金はどのようなたぐさんのお金よりも、光り輝いています。いつの日か、娘が大きくなり、「私、伝道に出ます」と言ってくれる日もあるのではと、ささやかな望みを抱き、貯金をしています。

私の弱い心臓が動いている限り、モルモン経との出会いを大切に、宣教師が真心から教えてくださったこの教えを胸に刻み、歩み続けていきたいと思っています。(まえかわあつこ 1947年生まれ、初等協会会長)

妹からの電話

大久保 アイ



「姉妹は宮古で初めてバプテスマを受けられたそうですね」とか、「どうして改宗したのですか」とよく聞かれます。そんなとき、「そうですねえ」と当時を振り返って思い出します。

ある日、ふたりの宣教師が私の家の戸をノックしました。「10分くらい」と言うので「10分くらいなら」と招き入れました。

宣教師の初めの言葉は「大久保さんは霊を信じますか」というものでした。「はい、信じます」と即座に答えましたが、それは自分でも驚くほど出し抜けた返事だと思

いました。

なぜそう答えたかと言いますと、主人が亡くなってから1週間ほど過ぎたある夜、ふと目を閉じたとき、真昼のような光が閉じた目の中に映りました。その中に亡くなった主人と子供が共に旅立つ有様が見えたのです。そのことをありありと覚えていたからでした。

宣教師は、ジョセフ・スミスや金版の話などをしてくださり、私にモルモン経を貸してくれました。ページをめくって、自分にかかわりがありそうな所を探しました。

俗世に染まった自分がこのような本についていけるだろうかと思う反面、神様に救っていただかなければ、勇気を出さなければ、恥を忍んで自分を神様の前に出さなければ、こんな思いが離れませんでした。宣教師から話を聞いているときも、神のみ使いと俗人とが目に見えない垣根で仕切られ

ているような思いがしました。

1980年の6月29日、私はバプテスマを受けました。教会員になったばかりで何もわからない私に、宣教師が「姉妹、系図探求をしませんか」と言って家族の記録用紙の書き方を教えてくださいました。職場から帰り家事を済ませてから取り組みました。1枚の記録用紙を書き終えるころには、いつも目がかすんできましたが、これが使命ならと思ってただ無心に書き続け、1年以上かけてやっと4代の記録を完成させました。

後日、神殿系図サービスセンターから儀式完了通知が届き、系図検査員の方のご苦労が身にしみました。

そしてその日は、亡くなった先祖へ思いをはせ、床につきました。夜明け前、眠っている私の枕元に何かザワザワと、大勢の人の声のような物音が聞こえるのです。「ああ、うるさい」とつい、布団をかぶりました。今、思うとたいへん失礼なことでしたので、まだ暗い戸外へ聞き耳を立ててみましたが、外はシーンと静まりかえっていました。



それから数日もしないうちに、遠く離れて暮らしている妹から電話があったのです。「姉さん、行方不明だった娘から連絡があったのよ。」

妹の長女すなわち私の姪は、家庭のいざこざからひとり娘も置いて出て行ったきり、4年間、行方不明になっていたのです。「娘の家の戸を『トントン』とたたく音がするんで、外に出てみるんだけどだれもない。そんなことがここ数日、毎晩続くんので、娘はもしかしたら私に何か起きたのではないかと心配して電話をしてきたらしいの。4年間の重荷が下りたわ。」

そういう妹の言葉を聞いて、私は先日のお出来事を思い出しました。そして、それがまさしく先祖の方々の働きによるものであることを確信しました。

あれから数年たった今、私の妹も、姪も幸せに暮らしています。(おおくぼ・あい 1924年生まれ、扶助協会副会長、系図相談員)

イエスさま

佐々木 環

わたしは、イエス様が40日だんじきをしたり、サタンから「飛びおとりしてみなさい。主が助けてくれるから。」などと言われても言うことをきかなかったの、すごいと思います。わたしだったら、40日間だんじきができないかもしれません。それにイエス様は病気をなおしてあげたりしました。わたしだったらできません。イエス様は十字架にかかってなくなられました。でももう会えないわけではありません。また天で会えるのです。イエス様はふっかつされました。そして、天へのぼっていきました。わたしは一度でいいからイエス様に会ってみたいです。(ささき・たまき 1977年生まれ)

おいのり

佐々木 哉

おいのりは、いつもしなければいけないのです。おいのりは感しゃしたりおねがいをしたりできます。おいのりは1日のうち、いつしてもいいことです。おいのりは、言った言葉が神様やイエスさまに通じます。悪い気持ちでおいのりすると通じません。いたずらしながらおいのりするのも通じません。おいのりでくいあらためられます。おいのりはべんりです。ほくやおねえちゃんのバプテスマのとき、朝おうちでおいのりをしたら、お母さんとほくとおねえちゃんがうれしきでいっぱいになって、なみだが出てきました。ほくもうれしかったです。(ささき・はじめ 1979年生まれ)

忘れがたいひとつの証

佐々木 敏枝

この教会の福音を知ったのは、1980年の春ごろでした。夫の反対や、自身自身の備えの足りないことから、バプテスマを受けることはできず、4年間、私は信仰の試しを受けました。再び宣教師が訪ねてきてくれたのが1984年6月、それから3カ月後にバプテスマを受けることができました。4年前は離婚するとまで言った夫が、いとも簡単に「いいよ」と許してくれたときには、自分の耳を疑ってしまいました。

しかし、教会員になることを許してくれた主人もすべてを理解してくれたわけでは

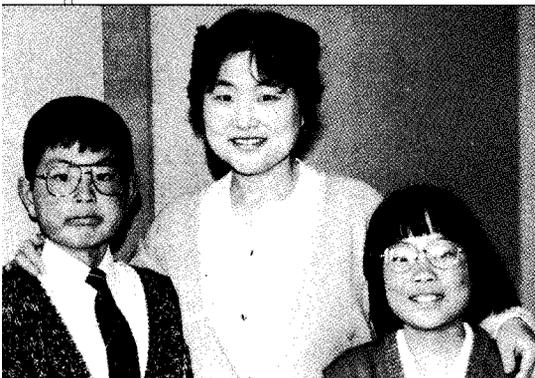
なく、時がたつにつれ、「どうして自分は許すと言ったのだろう、失敗したなあ」とつぶやくこともありました。その年の12月の経験を私は今でも大事に心の中にしまっています。

そのころ私には3人の子供がいましたが、夜、子供たちを寝かせてから聖典を読むのが日課になっていました。その夜も、私は聖典を読み、いつも聖典を入れておくかばんをそのままにして休みました。朝起きると、私より先に主人が起きていて、こたつに横になっています。テーブルの上には小さなお酒のビンが置いてありました。たばこも吸わず、お酒もほとんど飲まない主人が、朝からお酒を飲んでいる姿を私は信じられない思いで見っていました。主人はひと言も口をきかず、仕事に行きました。

私は主人の身に何があったのだろうかと思いました。そばにあったかばんを持ちあげてみるといやに軽いので、中をのぞいてみると聖典が入っていません。私は主人がどこかに隠したのだと思い、戸棚やゴミ箱

など手あたり次第探しましたが、見つかりません。仕方がない洗濯でもしよう、と洗濯機の中をのぞくと、水の入った洗濯機の中に、モルモン経、聖書、教義と聖約の3冊が捨てられていました。私は急いで取り出し、中を開いてみました。モルモン経の中には1ページごとに×印が書いてあり、×印のないところは糊でべったり張ってありました。私は悲しみと、そのようなことをした主人の心が理解できず、その場に座りこんで涙を流すだけでした。

なぜ、どうして……という思いで何もすることができませんでした。私が何か主人の大切にしている物をめちめちやにしたら主人はどんな気持ちがするだろう。私の気持ちがわかるだろうか。そういう思いが心の中に芽生えたとき、私は1冊の本を手にしていました。4年前のクリスマスの日、バプテスマを受けられなかった私のために、宣教師たちが赤いシクラメンの鉢植えと一緒にプレゼントしてくれた「回復された真理」という本でした。私はその本をほとんど読んでいませんでしたが、その朝、なぜかその本を手にし、ページをめくりました。そのとき目に留まったのは、様々な迫害を受けても、それに報復しようとはせず、すべてを主にゆだねた聖徒たちの話でした。そうだ赦さなければいけない。私にも悪い



●佐々木敏枝姉妹(中央)、哉くん(左)、環ちゃん(右)

ところがあったのかもしれないのだから、主人を責めることはできない。私が責めてることをしなければ、きっと主人も考えてくれるだろう。そう決心すると、さっきまで沈んでいた心が晴れ晴れとしてきました。私はかつて、そのときのようなさわやかな赦しの気持ちを持ったことはありませんでした。

帰宅した主人はいつもと変わらず、私もいつもと変わりませんでした。しかしその日を境に、主人は私の教会活動に積極的に

理解を示してくれるようになり、宣教師の壊れた自転車を直してくれたり、教会で必要な物を家から運んでくれたりと、見る見る変わっていきました。数カ月たったある日、私がしまっておいたボロボロの聖典を見つけた主人が「あっ、なつかしいのがある」と言いました。私は「そう、だれかさんがこんなにしたのねえ」と笑いました。あのとき、神様の助けによって、主人を赦す気持ちを持つことができたおかげで、こんなふうに笑って話せるのだと思いました。

月日が流れ、私は今も主人の理解に支えられて教会員として生活することができました。2月には初めて神殿に入りました。主人は承諾書を書いてくれましたし、4人の子供の面倒をみながら留守を守ってくれました。教会員の私よりはるかに教会員らしい生活をしている主人です。主人と共にいつの日か、神殿で愛する子供たちとの親子の結び固めができることを願っています。
(ささき・としえ 1949年生まれ、扶助協会会長)

新聞からの話題

昨年12月31日付「中国新聞・広島版」で、広島ステーク部五日市ワード部の桐林ご家族の家族新聞(THE KIRIBAYASHI TIMES)が紹介されました。その家族新聞の中から3つの記事をご紹介します。

福音によって 子供を育てる (桐林タイムズ第2, 6号より) 桐林 ミチコ

昭和62年(1987年)12月23日 (水曜日)

1967年3月25日、広島大学卒業後、英語教師として3年間勤務してきた高校を思いきって退職しました。生後11カ月の潤と、2番目の子供の出産を控え、教師の仕事と育児の両立はむずかしく感じられ、そのうえ、育児を他人に任せることは自分にとって貴重な人生経験を失うのではないかという、あせりに似た思いがありました。それから1週間後の4月2日、よく晴れた日でした。ドアをノックする音がありました。出てみると、ふたりの外国の方が立っていました。「神様はいると思いますか」「神様に興味がありますか」とはっきりした日本語で聞いてきたので、「そんな気がします。興味があります」と答えました。しかし、何年か前の私だったら興味がないと答えたいはずでした。

私が潤を産んだとき、正常分娩の予定が一転して、命にかかわるひどい難産となりました。私が産んだというより、「神様から授かったのだ」というような不思議な気がしてなりません。出産後は、夫婦で子供をどのように育てようかとよく話し合い、私たちよりもっと立派に育てほしい、それには私たちの親が私たちを育ててくれた以上に何か良い教育方法はないものだろうかと考えていた矢先のことでした。



新聞で深める 家族のきずな

廿日市の桐林さん発行

出来事や近況報告

月1回 親類・友人にも届ける



「家族のきずなを深めれば」と佐伯郡廿日市町内の建築設計業一家がユニークな家族新聞めぐりに取り組んでいる。毎月一回を発行し、親類の手紙から家庭内の出来事などを紹介。読者になってもらっている友人や縁者から「読むのが楽しみ」と好評を得ている。

家族新聞「THE KIRIBAYASHI TIMES」(B)が宣教師として東京に赴任した4判(二)を発行している。ところが、それまで家族が離れ離れは、地前二丁目、建築設計事務所に住むことになった。家族間の意思疎通を大切にする「新聞めぐり」を思いついた。

発行のきっかけは、四月、妻のミチコさん(52)を編集長に、一頭の大學生(5)がワイドを駆使して応募。翌五月に創刊号を発行した。毎週、毎月一回発行している。内容は長男の

その日から毎週1, 2回、シュルツ長老とタッカー長老からレッスンを受け始めました。知恵の言葉という戒めがあることを知り、これは私にとって大きな試練となりました。コーヒー、紅茶は19歳のときから1日に5, 6杯は飲んでいたので、でも体に悪いということは私のそれまでの経験からも納得できましたので、きっぱりやめることができました。

当時の主人は、胃が弱く、体重は52キ



近況報告や旅行記、自宅新築状況など、中学二年の長女、夏子さんの「きずな」を家族全員が担当して「きずな」を深めたいと話していた。

の執筆。約六十部をコピーして、親類、友人等に郵送している。ミチコさんは「編集過程で意見が食い違ってもかまいません。子供でも「新聞めぐり」を通して、子供の将来もっさり、きずなを深めたのは確か。友人からも家族新聞を作ったと連絡ももらってうれしくて」と話していた。

口。酒は好きではなく、むしろ付き合いで飲むのすら苦痛だったほどですから、やめるのは簡単でした。しかし、たばこについては、それまで何度か禁煙を試みていましたが失敗に終わっていましたので、「むずかしいなあ」と言っていました。しかしそのたばこも、バプテスマを受ける10日前には

ピタリとやめていました。「楽にやめられたので不思議だ」と言っていました。

このようにして私たち夫婦は、5月23日にバプテスマを受け、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になりました。この福音によって子供を育てよう、そう決心したのです。

1982年の夏、アメリカのアイダホへ行く

機会があり、シュルツ長老と16年ぶりの再会をしました。当時の彼の日記帳やアルバムを見せてもらい、その中に主人が禁煙できるように彼と同僚でひそかに断食をし祈っていたことが記されているのを見たときは、そうだったのかと感激の涙を止めることができませんでした。□

潤長老からの手紙

(桐林タイムス
第2号より)



昭和62年4月20日、桐林潤長老は五日市ワード部の人々に見送られて広島を発ちました。これは、JMTC(日本宣教師訓練センター)から両親にあてた最初の手紙です。

お父さん、お母さんへ

元気していますか? JMTCに入ってきたようで6日目です。朝5時に起きて、

夜は10時半に寝ます。その間、建物から出ることはほとんどなくて、運動不足プラス食欲不振です。でも、体も心も健康です。私が今まで元気に育つように見守ってくれていたことに感謝しています。まだ、宣教師になって実際に働いてはいませんが、レッスンプランを学んでいて、外人宣教師の大変さがよくわかります。そして、1歳のとき、お父さん、お母さん、私の3人のところを訪問してくれたシュルツ長老、タッカー長老の犠牲を考えます。

JMTCで学んで、しみひとつない清い状態でなければ、キリストの教会の代表者として働き得ないことがよくわかりました。お父さんが「家族のことも、ほかのことも、全部忘れて……働け」「家族のことなんか考えて心配したり、思い出したりするような伝道をするな」「伝道中は、親でもなければ、子でもない。そういうことは伝道とは関係ない」と言ってくれたことが心に焼き

ついています。

今考えて、そのことが成功の秘訣だと思います。自分のための名誉やプライドでは、決して人のためには働けないという意味であったと思います。本当によいアドバイスをいただきました。心から感謝しています。

真の末日聖徒となるよう、お父さんお母さんも望んでくれていることを感じます。お父さんのしてくれたこと、お母さんのしてくれたことをしっかりと心に留めて実行できたら、私は良い主の道具になれると思っています。ここに来てお父さんの言ってくれた言葉の意味がよくわかります。確かに成功の秘訣だと思います。ここでも同じようなことを指導者が教えてくれますが、私はお父さんが私にそのように教えてくれたので、きっとできると思います。清くへりくだって、謙遜、従順に心がけていこうと思います。(潤長老は、現在東京北伝道部で伝道しています)

私のお父さん、お母さん

(桐林タイムス
第7号より)



桐林 夏子

まず、お父さん。昔のお父さんを知っている人はよくわかると思うけど、かなり太っています。写真なんか見たら信じられないほどです。お父さん自身は、やせた方が良く考えているみたいだけど、よく食べています。

でも私は、今のお父さんが一番ステキだと思います。性格は昔っから全然変わって

いません。怒ったら命まで飛んでいってしまうほどの迫力です。私と性格が正反対なので、私はいつもびくびくしています。お父さんは物事を進めるのがとても上手です。そのへんから言っ、お母さんを選んだ理由がわかります。

お父さんの一番好きなどころは、私の悩み事などを真剣に聞いてくれることです。前なんか、別に聞いてくれなくてもいいことなのに、「言ってくれんとご飯が食べられんけえ、言ってくれ」と言われて、早くご飯を食べさせてあげたいなあと思って言いました。そしたら、「これでご飯が食べれる」と喜んでくれました。

では、お母さん。

私のお母さんは、人一倍考えて頑張る人です。私はそういうところを見習っていきたいです。それと人一倍、笑い声の大きい人です。ほかの人の笑い声を消してしまう

ほどすごい笑い声です。その笑い声がお母さんの元気の元だと思います。

一番の自慢は、なんたって料理を作るのが速いこと。昔はそうでもなかったけど、お父さんの厳しい指導によって、だんだん速くなっていきました。お母さん自身も自慢しています。

お母さんの一番好きなどころは、私がお願いしたことに対して協力してくれることです。お母さんは、すごく知恵が豊かな人で、判断力の優れた人です。すごく尊敬しています。私は将来、そういう人になりたいです。

私はお母さんにたくさん怒られたけど、お母さんはいつでも私のために厳しくしかってくれます。私はこんな両親を持って、すごく幸せだと思います。今まで何度も反抗してきたけど、これからは素直になって、すばらしい女性になりたいと思います。□



4月に召されたJMTC第107期生43人の名簿

S：ステーキ部, D：地方部, W：ワード部, B：支部

後列左から1~14

中列左から15~28

前列左から29~43

〈名 前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉	〈名 前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 川畑 衛	北陸D/金沢B	東京南伝道部	23. 大橋 三友	名古屋西S/一宮W	岡山伝道部
2. 望月孝則	横浜S/川崎W	神戸伝道部	24. 桐林 慶	広島S/五日市W	大阪伝道部
3. 本館 修一	大阪北S/京都洛北W	神戸伝道部	25. 中屋敷 淳	盛岡D/北上B	東京北伝道部
4. 与那覇博一	沖縄那覇S/那覇東W	福岡伝道部	26. 小松 伸治	大阪北S/京都洛北W	仙台伝道部
5. 倉林 活夫	東京S/三鷹W	名古屋伝道部	27. 宮田 孝司	仙台S/上杉W	札幌伝道部
6. 村田 昭洋	大阪堺S/泉佐野B	仙台伝道部	28. 大村 雅三	福岡S/北九州W	大阪伝道部
7. 新名 敏宏	札幌S/豊平W	神戸伝道部	29. 村田 マリ	町田S/町田第1W	岡山伝道部
8. 井 高 寛	熊本D/熊本B	神戸伝道部	30. 梁谷 敬子	大阪北/京都洛南B	福岡伝道部
9. 増子 和義	札幌S/豊平W	大阪伝道部	31. 磯田 光希	山口D/下関B	福岡伝道部
10. 山本 悟	大阪北S/大津B	神戸伝道部	32. 山入端 藤子	沖縄那覇S/名護B	仙台伝道部
11. 小森愛一郎	神戸S/明石W	札幌伝道部	33. 植村民代	熊本D/長崎B	仙台伝道部
12. 西嶋 三喜	札幌西S/手稲W	東京南伝道部	34. 新井 尊子	熊本D/延岡B	大阪伝道部
13. 山岡 忠	札幌S/豊平W	仙台伝道部	35. 平田 節子	熊本D/長崎B	東京北伝道部
14. 山本 浩幸	札幌S/白石W	大阪伝道部	36. 岩崎 尊美	大阪北S/茨木W	札幌伝道部
15. 高岩 亜輝子	福岡S/井尻W	札幌伝道部	37. 内藤裕雅子	神戸S/尼崎W	福岡伝道部
16. 土田 治美	札幌S/白石W	東京南伝道部	38. 上村 寿子	熊本D/熊本B	大阪伝道部
17. 西川 文子	大阪北S/城陽B	福岡伝道部	39. 金川志津子	福岡S/久留米W	大阪伝道部
18. 小山 里美	岡山S/津山B	神戸伝道部	40. 小坂 憲子	大阪北S/岡町W	東京北伝道部
19. 柏倉 誓子	町田S/藤沢W	福岡伝道部	41. 及川 美佳	盛岡D/北上B	東京北伝道部
20. 小浜 勝美	沖縄那覇S/沖縄W	仙台伝道部	42. 松下まな実	東京南S/大岡山W	神戸伝道部
21. 高草木美樹	東京南S/千束W	仙台伝道部	43. 由利 郁子	仙台S/長町W	神戸伝道部
22. 岡 藤 貴子	山口D/宇部B	東京南伝道部			

